
盲目の復讐者

翠色じゃないヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盲目の復讐者

【Nコード】

N9359L

【作者名】

翠色じゃないヒスイ

【あらすじ】

欲望が渦巻く街、背徳都市（ハイオン）で中立を守る組織『』の一員であるジェイルが出会ったのは光を失った少女。復讐を誓う盲目の魔法使いセラスとの出会いによって、情性で回っていた運命が加速する。最強を目指す剣士、戦う修道女、生臭神官、謎多き美女、野生児少女、規格外な暗殺者、通りすがりの錬金術師、喋る案山子、盗賊に海賊。世界を飛び回り多くの人々との邂逅を経て、辿り着く先は運命の終着点。そこで語られる意外な真実は、セラスに希望をもたらすのか、それとも絶望か。笑いあり、涙あり、アング

ーグラウンドに正義なし、で送る剣と魔法の純正統派ファンタジー。

その0（前書き）

残酷描写および性的描写が出てくることもありますが、全年齢を対象にしています。現実と非現実の区別がつく方のみお読みください。

その0

今日も相変わらず、雑踏の中を行き交う人々。

悪く言えば薄汚れた、良く言えばみずばらしい、悠長に伸びる砂地の道。どこにでも塵屑こみくずは転がり、檻褸切れを纏った物乞い達が座り込む。

街を少し歩けば、数件に一つは如何わしい店があり、派手な格好をした女達が男を誘い込む。日も真南に昇った真昼間だと言つのに、絶えず女達の甘い声が通りに響き渡る。

ここはそんな、墮落した人間達が集まり、欲望のままに生き続ける街。

故に、人々はこう——背徳都市「ハイオン」と——呼ぶ。

「オバちゃん、一つ」

革張りのライトアーマーを着込んだ若い男が、軒先に並んだ露店の女店主に声を掛ける。年は二十歳そこそこ、茶色の短髪と黒色の瞳を持つ、彫りは深いが柔らかい雰囲気のある二枚目半の青年。背中には布に包まれた『L』字の大きめの棒を背負っている。

露店に並べられた木箱には紅い果実が山積みになっていて、それを一つ手に取ると店主に銅貨を手渡す。

「ご苦労さん」

「おう。相変わらず扱き使われてるよ」

店主と軽い挨拶を交わし、男は鎧から食み出た布地の部分で果実を拭く。そして、おなじみの愚痴を一言。

彼はこの街を取り仕切る組織の一員で、ほぼ毎日のところこうして街の見回りをしている。

「そうかい。ああ、苦労ついでに申し訳ないんだけどねえ——」

「あん？」

見回りの理由は、主に街の治安を守ること。

たぶん、店主の続けた言葉も、それを意味するものだったのだろ

う。果实をかじりながら、間の抜けた生返事を返す。

「——あの娘、助けて上げられない？」

店主が指差した先には、路地裏の奥に数人の男女がいる。

冴えない三人の男が、一人の女性——というよりも少女——を取り囲んで話をしている。いや、話と言えば聞こえは良いが、男達の表情から会話の内容は察するに余りある。

ケーブとフードで身を包み、手には木製杖ウッドワンドを携えている。遠目に、

路地裏の暗さで見ても分かる、純白の肌をした少女。背中に何か棒状の物を背負っているようだが、そこまでは男達に隠れて判断しかねる。

ここいらでは見かけない顔だ。

「新参者だな……。放っておけ。この街は無法地帯だが、ちゃんとした決まりもある。掟を守らない奴は、痛い目を見なくちゃわからねえんだよ。それに、俺は役人や憲兵とは違うんだぞ」

男は店主の頼みを一蹴し、果实をもう一口かじる。

確かに、この街では誰もが欲望のままに生きている。しかし、それを知らない住人は、いずれ災厄が身に降りかかるのだ。

また、むやみやたらに他人へ干渉しないのもこの街の掟だった。
「……つれない子だねえ。あの娘、酷いところに売られちゃうわよ。あんたとあまり変わらないぐらいの年なのに……ああ、想像したくないわッ」

店主はそうぼやいて、露店の整理へ戻る。

男は、少女と男達のやり取りを眺め続ける。そろそろ、少女の我慢も限界に来るだろう。俯く少女を眺めて、男は思った。

そして、果实をかじる。

響き渡る爆音。白日の下でも分かる紅い炎が、路地裏から噴出して空気に溶け消える。立ち上る熱気は陽炎を作り、燃えた木切れが男の元へ飛来する。

男は微動だにせずその様子を見据え、燃え尽きようとする木切れは頬の傍を掠めて消えた。

通行人は騒ぎに足を止め、それでも良くある喧嘩だと分かるとまた歩き出す。

「掟その二、身の程知らずは痛い目を見る、だ」

陽炎の向こうに見える、服と髪を軽く焦がした男達をほくそ笑み、路地裏に向かって歩を進める。

少女もまた、驚いて硬直する男達を尻目に路地裏から出てくる。

「気をつけた方がよいぜ。この街の奴らは、流れ者でもない限り、どこかの組織に入ってる。下手な騒ぎを起こせば、次に痛い目を見るのはあんた、だ」

揺らぐ空気に映る白に向かって、男は気紛れに起こった忠告を口に出す。

「……？ 何かご用でしょうか？」

しばしの間を置いてから、少女が少しずれた返答を返した。

少女はこちらを向いては居るが、自分を見ていない。陽炎は薄れ、男にも少女の訝しげな表情は見て取れる。

「もしかして、目……」

察して、言いかけた言葉を濁す。

少女の瞳が、程度こそ分からぬものの、ほとんど光を失っていることに気付く。

「それがどうかしましたか？ この街は、目の見えない人間が入ってはいけない規則でもありましたか？」

ようやく、少女の視線が男を見定めた。

瞼は緩やかな曲線を描きながらも、少女の視線は思いの他、鋭い。どちらかと言えば円らかな瞼に収まるのは、雪原を彷彿とさせる白い瞳。虹彩を含め、フードから零れた髪も白。そんな白一色が、この汚れた街には異質だった。

「ああ……いや、そんな決まりはねえよ。単なる先輩からの忠告だ」
少女の眼光に僅かに当てられながらも、嘲るように言葉を続ける。
言うべきことはそれだけで、これ以上は干渉すべきではないと心の中で警鐘が鳴る。

だが、何故か言葉の方が喉から漏れ出してしまっ。

「目の見えない女の子が一人でなんでこんなところへ？ お父さんと逸れたのなら、お兄さんが探してやるのか？」

「いえ、一人旅です。人を探しているのは確かですが……この街に居ると言う噂だけを頼りに来たので、しばらく見て回ったら出て行きますのでお構いなく」

迂闊と言えば迂闊、まさか軽い思いつきで出た言葉が凶星を突くとは。

本能には従うべきだと、男は後悔を覚えた。

「そうか。五体満足で出て行けるように、祈つといてやるよ」

もうこれ以上の干渉はするまいと、来た道を歩き去る男。

別れ際の挨拶は馬鹿に簡素で、たぶん、二度と関わりあうことは無かろうと思っていた。

しかし、この出会いが、惰性で回っていた背徳の街を加速させようなどと誰が想像しただろう。異質な純白の少女と共に訪れた運命の齒車が、誰も知らぬところで周り始める。

「はて、ああいうのが外では流行ってるのか？」

少女の白さよりも、どこか異質に映るものを思い出し、立ち止まった男は後ろを振り返る。少女の姿は雑踏に紛れて消えていた。

その0（後書き）

はい、誠に遺憾ながら、ファンタジーに挑戦ということになりました。正統派と謳いながら、実は正統派じゃないファンタジーです。聖剣とか魔剣といった武器は出てこないし、勇者なんて持つての他。モンスターも出てくるけど、どちらかと言うと対人戦の方が多い。まあ、何を持ってして正統派というのは良く分かりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

また、作者である私はこれまで何度もファンタジーに挑戦して敗れて来ました。もしかしたら最後まで続かない、もしかしたら矛盾が出てきてしまう、そんなこともあるかも知れません。良い訳染みたことは嫌いなのですが、それらの可能性を鑑みてお読みください。宣伝で申し訳ありませんが、私が同時連載する『羊の鎧を着た狼の戦場』もよければご覧ください。更新は、一週間ぐらいで交互にしていきます。執筆速度によっては、早まることもあるかと思います。

そして最後に、忌憚無きご意見、ご感想をお待ちしております。

その1

見回りを終えたのは、遙か彼方に夕日が沈もうかという頃。

街を見回るのは彼一人ではないにせよ、それなりの面積を有する背徳都市を全て見て回るのは半日掛りの仕事だ。特に、どこかで問題が起きて、その調停をするとなれば一日を割いても足りない。

五指では数え切れない組織が集まり、四、五個の派閥に別れ、日々睨み合いを続ける。壁を挟んで燃え盛る炎、壁の上には大量の爆薬が載っている。爆薬がどちらに落ちても壁は壊れ、炎は猛威を振るう。

そんな危ういバランスの中で成り立つ、それが「ハイオン」という街なのだ。

それらの組織、派閥がバランスを崩さぬように、調停を行うのが彼らの仕事である。いつ頃から、彼らの組織がそんな仕事をしているのかは知らないが、役人や憲兵が裸足で逃げ出すような場所なのだから仕方がない。

だから、と言ってしまつと不公平感是否めないが。

「街一番の憎まれ役か……。俺も、損な役回りに拾われちゃったものだな」

中立という立場に、男は呆れながら自嘲の笑みを零す。

どこの派閥にも所属せず、中立を守る組織。街の一般人にとって、街を火の海にしない頼れる組織だろう。が、派閥の中には彼らを疎ましく思っているのも居る。敵の方が多い。

実のところ、一番留意しなければならないのは彼らの組織なのだ。

「いや、一番の火種が居たんじゃ、いずれは……グエッ！」

「何をばやいているんだ、ジェイル？」

噂をすれば何とやら。背中を襲う衝撃に、ジェイルと呼ばれた男は、首を絞められた鳥のような声を上げ、聞き覚えのある声に振り向く。

「あね——」

「——アケットと呼べって言っているだろ。それより、もう見回りは大方終わったんだろ？ どうせだから、飯でも食いに行こう」

背中を叩いた火種の張本人が、ジェイルの言いかけた言葉を遮る。青銅製のライトアーマーを着込み、両腰には軽く湾曲した剣。顔全体を白い包帯で隠した、風変わりな剣士と言った風体の人物。名前をアケットと言い、ジェイルの兄貴分のような存在で、同じ組織に所属している同僚だ。

ジェイルはアケットに仕事を教えられて、性格は似ているところがある。しかし、傍若無人ぶりはどちらかと言うとアケットの方が上だ。

「えエツ。また、あそこに？ 怒られるぞ。いつも、いつも、給料で食わせて貰ってたら……」

「細かい奴だなあ。どちらにせよ、あいつが稼いだ金も俺達の食いに代わるんだ。それが貰った後でも、貰う前でも同じだろ？」

包帯に隠れていても分かる表情豊かな百面相。夕日を映して深紅に染まる銀色の瞳に笑いかけられ、ジェイルは言葉を失う。

年や腕っ節に引け目を感じながらも、一番の理由は他にある。

「分かったよ、分かりました。でも、愚痴の聞き役は任せるからな

……」

洪々と了承するジェイル。

歯切れの悪い返事を聞いても、アケットは意気揚々とジェイルを連れてしばらく歩いた先の食事処へ入って行く。

宿屋の間を縫って食堂を営む店で、二人とは別の同僚が給仕の手伝いをしている。その為、同僚の給料を使って飯を食べ、毎度のようにお叱りを受けるのだ。それだけならば、まだマシな方だろう。彼らの組織で、最も問題を起こすのがアケットであり、持ち前の狭義心で起こしてきた問題はジェイルが知るだけで四回。

同僚曰く——

「死ぬまでに何回、問題を起こせば済むんですかッ？」

——とのこと。

たぶん、この飯屋を除いても他のところで厄介ごとを起こしてきたのだろう。

願わくば、自分を巻き込まないで欲しい。

「また来たのか、アケット。カフィーに怒られても知らんぞ」

ジェイルが心の中で祈っていると、店主の男が声を掛けてくる。

ジェイルを放って既に席へ着いていたアケットに、妙齡の店主も呆れを隠せない様子だ。家族は居らず、男一人と臨時雇いの給仕数人で切り盛りする、大きいとも小さいともいえない宿屋兼食堂。

「そんなことより、酒と飯だ。甘露酒と山豆^{かんろうしゅ}パスタを頼む。あッ、大盛りで」

「へいへい、分かりましたよ。で、ジェイルはどうする？ いつも
の奴か？」

「ああ……。今日は、煎り豆は帰ったのか。後でお叱りだな」

「年上を仇名で呼ぶとは、お前も恐れ知らずだなあ。確かに煎り豆^{カーフ}
薬^イみたいな名前だが、割と本人は気にしてるみたいだぞ」

などと、三人で言葉を交わしつつ、店主は苦笑を浮かべて厨房に消える。ジェイルもアケットの対面に座り、食事が来るのを待つ。

夜の帳が降り始めた時刻。客も今宵のピークを迎える頃、食事をするジェイルの前を見覚えのある顔が通りかかる。正確には姿だが、フードを外していたために疲れ切った顔がよく見えた。

「あいつ、ここに泊まってたのか……。うん？」

そしてもう三つ、おまけの顔がついてくる。

「どうした、美人でも居たか？ はぁ、ん、少し若い、可愛らしい娘^こじゃないか。うん、惚れたのか？ 一目惚れなのか？」

いつの間にか甘露酒を大ジョッキ三本も飲み干し、酔いが回り始めたアケットが酔っ払いのオヤジ宜しく絡んでくる。

決してそういうわけではないが、おまけの三人が気になった。昼間、少女に絡んでいた三人の男達。どうやら、今まで少女を付回し

ていたらしく、獲物を狙う肉食獣のような笑みを浮かべている。

「……嫌な、予感がする」

「夜這いなんて、この街じゃ良くある話じゃないか。逐一、気にしてたら身が持たんぞ。ああ、惚れた女を寝取られるのが嫌なのか。そうか、じゃあ助けて、ウンゲツ、ゴクツ……ゴクツ……プハアッ。こい」

四本目を飲み干すアケット。

喋るか呑むかどちらかにしろ。そんな台詞と一緒にジョッキの泡ほう麦酒を飲み干す。

別に干渉するべきところではない。例え少女が酷い目に遭おうと、彼女が引き起こしたことなのだ。自業自得で片付ける。

「店主、もう一杯！」

「それぐらいにしておけよ。カフィーの給料を使い切る気か？」

「何を言う。あいつの金は俺の金、俺の金は俺の金。って言うだろ？」

「言わねえよッ！」

正直、名前も知らぬ少女のことを気にしている暇はなかった。少女が、寝室のある二階に姿を消したのを見計らい、同僚のエゴイズムに突っ込みを入れる。目の前の同僚を放っておくと、何本のジョッキがテーブルに並ぶか分かったものではない。この街でも五本の指に入るほどの酒豪とは聞いていて、他の同僚からお目付け役を任されているので任務を果たそうとする。

店主も給仕達も、アケットの注文に聞こえぬフリをして慌しく店内を駆け回る。

「なんだ、この店は客の注文を無視するのか？」

確かに、酔っ払ってはいない。

「……………」

それに勘も鈍ってはいないようだ。

何かを感じ取ったアケットは、両手を腰の剣に持ってゆく。立ち上がり、ゆっくりと二階へ続く階段に歩み寄る。

階段の前に立ち止まってから、五秒か、十秒か、他の客や店員には分からないぐらいだが、風の流れが変わった。それを感じ取った瞬間、二階から誰かの走る音が降りてくる。続いて降りて――飛び降りて来たのは、純白をなびかせた少女。

「退いてッ！」

少女が言い切るのが先だったか、

「ジェイル、この娘と雑魚は任せた。デカイのは、私がやる」

自分の体重はあろうかという少女を片腕で受け止め、そのままキヤッチボールでもするかのようにジェイルの方へ放り投げた。

これから何が起こるのか。それはアケットの一言が如実に物語る。
「喧嘩は何度もやったが、殺し合いは初めてだ」

その2

背徳都市「ハイオン」と呼ばれる街に着いてから、直ぐに取っていた宿に戻ったのは、日が暮れてからのこと。

昼過ぎから誰かにつけられていたのはなんとなく気付いていたが、まさか宿までついてくるとは思ってた。いや、追跡者の正体と、目的を考えれば予測のできたことだろう。

昼間の三人が、炎の魔法を喰らわせたことに憤ったのは、逆恨みも甚だしい。

『街を案内してあげよう』

などという甘言に乗った自分も悪いのだろうが、それでも如何わしい店に売り飛ばそうとしたことを差し引いても、非は向こうにある。

街を探索している間は、人通りの多いところを通って警戒したにしても、仕掛けてくるのが遅い。どうも、寝込みでも狙わなければ女一人、相手にできない奴らのようだ。

まあ、昼間は不意を突いて魔法を喰らわせたが、今度は上手くいかからない。ゆえに、気付いていないフリをして三人を誘き寄せた。予約していた部屋に戻り、部屋に一つしかない上げ戸の窓を開け、入り口のドアの前に立って待ち伏せする。

扉を開けた瞬間に、風の魔法をぶつけて返り討ちにしよう、という算段だ。

ドアに向けて構えた木製杖ウッドワンドの先端に、窓から吹き込んだ風が集う。ただ、風が部屋中に吹き荒れていた所為で、もう一人の追跡者の存在を失念していた。

目が見えずとも、微かな息遣いや足音などを五感が感じ取って、人の存在を知ることができる。その五感に引つかからず、気配を消して窓から侵入してきた。出来る限り宿屋に迷惑をかけない方法を選んだのが失敗だった。そして、失敗が僅かな隙を侵入者に与え、

逃げるチャンスを手握めたのも事実。

「セラス、後ろだッ！」

直ぐ背後から聞こえてきた声に、セラスと呼ばれた少女は身を翻す。侵入者が漏らした小妖精^{ピクシー}の溜息ほどの動揺を頼りに、杖の渦巻いた先端を向けて風を解き放つ。同時に侵入者が、構えていた短剣を放り投げる。

集う風に阻まれ狙いを定められなかった、投擲しようとしていた短剣。

「チッ……」

セラスと侵入者が舌打ちする。

両者が両者とも、攻撃を回避しようとしたために短剣も風も的を逸れてしまったのだ。風が窓の外に吹き出してゆき、短剣も入り口の扉に突き刺さる。

「セラス、ここじゃ魔法が使い辛い。外に出るぞ」

背後から聞こえてくる声に、セラスは暗黙の内に了承して駆け出す。部屋の扉を勢い良く開き、ドアの前にいた三人の男達を怯ませる。

「うおッ。ま、待てッ！ 逃げられると思うな！」

命を狙われながら、待てと言われて待つ馬鹿はいない。

「月並み過ぎて面白くねえぞ」

セラスのものではない声が、男達に言い残す。

「ああ……もう、黙っててッ。こんなときに挑発してどうするのよ」
口の減らない声の主に文句を言う。軽口もそうだが、今からセラスがしようとしていることにお喋りは厳禁。階段を駆け下りようとせず、十数段を一気に飛び降りる。

しかし、注意を怠っていた。

誰が上ってくるかもわからぬ階段を、飛び下りようなどとするのは愚策中の愚策。そこに、包帯を顔に巻いた剣士風の人物が唇を吊り上げて佇んでいるようなと、盲目の少女に気付けるものか。ただ、誰かがそこにいる、という漠然とした気配だけを感じ取る。

「退いてッ！」

間に合うわけのない忠告。接触事故は免れないと、咄嗟——ある種の脊髄反射——に目を閉じた瞬間、腹部を包み込むように柔らかい衝撃が訪れる。

決して、人と人がぶつかり合った衝撃ではない。

恐る恐る目を開けようとしたところで、今度は、

「ジェイル、この娘と雑魚は任せた。デカイのは、私がやる」

そんな台詞と同時に放り投げられる。

既に、何が起こっているのか理解できなくなったセラス。

気付けば包帯の剣士に受け止められ、放り投げられた先で別の誰かに抱きかかえられている。体では分かっている、そんなことを軽々とやられたなどと誰が思おうか。

「喧嘩は何度もやってきたが、殺し合いは初めてだ」

そして、先刻の誰かが呟いた物騒な一言。ただ、どこか口調と似合わぬ優しい響きを残す。

続けて三人の男が階段を下りてきて、階段の前の人物と睨み合う。
「用事があるのは、あの娘だろ？ 邪魔はするなよ？」

その言葉に、男達は生唾を飲み込む。睨み合った人物が発した言葉は、父親が子供に向かつて『仕事があるからあつちで遊んでなさい』と言っぐらいの声音だ。それなのに、三人の男を黙らせた上、問答無用で矛先をこちらに向けさせる。

「おいおい、助けるつもりなのか、そうじゃないのか、はつきりするよ」

「女を守るのは男の仕事だ。それに、女の子を四人掛り弄ぶというのは仁義に反してるだろ？ 一人は俺が受け持てやろうと言っているんだ、ありがたくその三人と遊んでいろ」

「ありがたかねえよッ！」

知り合いらしき人物と、ジェイルという昼間の男との掛け合い。

「あ、あのお……」

「邪魔になるからお外に出ていな、お嬢ちゃん」

声を掛けようとすれば、この様だ。

彼らは店内で一暴れしようと決めているのか、剣呑な雰囲気到我先へと逃げ出した客など目には映っていない。その様子を見て、溜息一つで片付けようとする宿屋の店主も肝が据わっている。

「あまり店を壊すなよ」

「そいつはアケットに言ってくれ、って、もう行っちまったか」

店主の憂いなどなんのその、アケット呼ばれた人物は既に階段を上って二階に消えていた。

「お嬢ちゃんも、そこにいと巻き込まれるぞ」

留まって男を手助けしようとしていたセラスは、店主に腕を引っ張られて無理やり外に連れ出される。

それを見て、三人組が慌ててセラスを追ってくる。

「待ちやがれッ。その娘をこちらに渡せッ！」

三人組の一人が、昼間の男と擦れ違おうとした瞬間、木製の何かが碎けるような音。

「ゴヘッ……！」

ジェイルが、椅子を放り投げてぶつけたのだ。顔面に椅子の背もたれを受けて、三人組の一人が撃沈する。

残りの二人は、ジェイルを素通りできないと分かり曲剣シミターを抜く。

「それで良い。任された仕事を放り出すと、アケットに怒られるんだわ」

そして、ジェイルが背中シミターの「」字をした長物を抜き取りながら、口角を吊り上げた。

「武器を取ったってことは——」

巻かれていた布が取り外され、俗にハーケンと呼ぶ登山用の器具を大きくしたような得物が姿を見せる。

「——殺されても文句は言えねえぜ！」

言い切ると同時に、一步を踏み出してハーケンを横薙ぎに振る。勝負は一瞬。

男は受け止める暇も避ける暇もなく米神を貫かれ、白い脳髓が真

紅に染まって床に散る。返す刃が、最初の男を連れて二人目の男――これも頭――を串刺しにした。

ハーケンの刃に脳漿を奪われ、涙腺や鼻腔から鮮血を垂らして事切れる男。その顔は刹那の恐怖に固まり、虚ろな目だけが大きく見開かれている。痛みこそ無かっただろうが、恐怖という感情のみで死ぬとすればこんな顔になるのだろう。

血と脳漿の混じりあった形容しがたい匂いに、咽返りそうになっていると、先刻、椅子をぶつけられて昏倒していた男が意識を取り戻した。セラスは、目の前の惨状から意識を逸らすこともできず、ただ呆然と事の成り行きを見守る。

「く、クソが……。もう許さねえ。ぶつ殺して……。え？」

悪態を突きながら体を起こしたが、唐突に言葉を中断する。男は何が起こったのか、理解できないと言いたげにジェイルを見ただろう。続けて、視点が九十度ほど反転して天井を見上げている。

起き上がるうとしたところで、燕返しにハーケンで腹部を貫かれ、弧を描きながらテーブルの上へ。周囲から見ていた人間には、そうとしか映らない。

最後にジェイルが、テーブルに刺さったハーケンを手放して、左手を胸部に運びながらのお辞儀。

「馬鹿三人の生串刺し、一丁上がりでございます」

テーブルを染めて行く赤ワイン仕立てのスープ。活きの良い三匹の馬と鹿が完璧なレアで串に刺され、野菜スティックが頂上を飾るフルコースのメインディッシュの如きメニュー。本当の料理ならば、流石と言える手際だ。

しかし、セラスの口から漏れた言葉は賛辞ではなかった。

「む、惨い……」

嗚咽とも、腹腔の気持ち悪さとも異なる何かが、喉の奥から込み上げてくる。

そこでようやく、意識の方が先に惨劇の気配から逃げ出した。

その2（後書き）

ああ、いきなりの残酷描写で読者さん達が引いてる……。

ホント、コメディでもない限りは私の小説に残酷描写が絶えないでしょうねえ。どうしてこんな荒んだ性格になってしまったのか、自分でも検討が付きません。

まあ、こんな小説ですが、これからも宜しくお願いします。

次回からは、少しずつ世界観の説明に入っていくので、残酷描写等は少なめでやや長くなります。章が進む度に節の量が増えるのは仕方ない。

その3

鈍くも甲高い軋みを上げる階段を上り、薄暗い二階の廊下にたどり着く。

柱に掲げられたランタンの光だけが微かに周囲を照らす。廊下を歩いたびに、下手くそな弦楽器だけの協奏曲が響く。

「いつまで隠れているつもりだ？　あまり観察されるというのは好かんだが。まさか殺し屋が、私の趣味は人間観察です、なんて言うんじゃないだろうな」

二階に来てから、一向に姿を見せようとしない人物を、アケットは独り言のように揶揄する。

完全に気配を消し、どこからかこちらを見据えられる。ただのゴロツキとは逸した、絡みつくような敵意。すぐに、相手が正統派の暗殺者であることを悟る。アサシン

この世界には、神に仕える者達が定めた二十九の職がある。

【アサシン】という職もその内の一つで、格好こそ剣士ではあるがアケットも【シーフ】の職を持つ。実のところ、【アサシン】は【シーフ】を極めた者だけが、【ローグ】と【アサシン】のどちらかの職に昇格できる。

ようするに、実力は敵の方が上のはず。

「弱いもの苛めをしないと言っなら、それも結構なことだ」

【シーフ】としての腕で【アサシン】の敵に勝てるとは思えないが、持ち前の狭義心と戦闘狂の癖がうずく。

腰の二本の舶刀カッタラスを抜き、敵の居場所を探ろうと気を配る。そして、不意に廊下の奥へと駆け出す。

「貰ったッ！」

肉食獣の如き直感で、闇に紛れた暗殺者へ切り掛かる。

反撃のつもりか、闇の中から短剣が飛来する。それを片方の舶刀で叩き落とし、もう一本で闇に斬撃を繰り出した。袈裟懸けの一撃は

虚空を切り、闇の塊が跳躍して再びどこかへ姿を消す。

「こつもあつさりと避けられると、俺も悲しくなるよ。正々堂々とまでは言わんが、正面切つて遣り合つのが俺の流儀なんだよ……ふむ、そのつもりは無いみたいだなッ」

軽口を叩いている間に、背後から数本の短剣が投擲される。

瞬間的に八本の攻撃を見切ったアケットは、上半身を狙ってきた三本を叩き落し、身を屈めて一本を回避する。下半身狙いの残り四本は、一番上方の一本を横に弾くと、跳躍と同時に宙返りを決めてやり過ごす。

「ざつと、こんなもんだ。そんなチマチマした攻撃じゃ、いつまで経っても勝負がつかんぞ」

一筋の乱れもない短剣の投擲も見事だが、それを難なく避けるアケットも同文。

余裕を見せた挑発に、少しずつ敵が乗り始める。カシツとバネ仕掛けの何かが飛び出す音が聞こえ、ランタンの灯りが六本の細い刃を照らし出す。

「鉤爪か……」

闇に浮かぶ六本の刃を見て、アケットは困ったように呟きを漏らした。

戦う者にとって、武器は手足の延長。そう捉える者も少なくは無いが、特に手甲爪型の武器は通常の刀剣よりも自由が利く。なによりも、体術と合わせた変則的な攻撃は動きを見切り難い。

「愛用はそつち、みたいだな。面白くなってきたぜ」

それでも、悪い癖が疼き出す。

「俺はカイナ。あんたみたいな面白い獲物に遭つたのは初めてだ。名前を聞いておこつ」

血が滾り始めたところで、唐突に暗殺者——カイナが口を開く。いきなりの自己紹介に、拍子抜けしながらも応える。

「……俺はアケット。しがない仲裁役だ」

「覚えておこつ」

「腕ね。^{カイナ}聞かない名前だが、新参か？」

「雇われの身だ」

「あつ、そ。ただし、覚えておいてやるのは俺の方だぜッ！」

会話の途中で切り掛かるなど卑怯千万だが、喧嘩を酒の肴に生きてきたアケットの辞書に卑怯なんて言葉は載っていない。

この熱く燃える血潮を、もっと滾らせ、そして冷ましてくれる敵を探し求める。ただ、一つの夢を思い描いて。

懷に飛び込み、横薙ぎに始まり二文字の斬撃。鉤爪に阻まれて残響と火花の競演を演じる。留まることを知らず、アケットの連撃は右へ左へ繰り出されてゆく。手甲爪の変則さに負けない連続攻撃で、反撃を許さず。

威力、速度、技術ともにバランスの取れた剣撃は、正面からの戦いを避けてきた暗殺者にとって疎ましいことこの上ない。故に、剣の道だけで生きてきたアケットは、職の階級で負けていても戦いでは負けないと信じていた。

しかし、その過信が時として危機を招く。

カイナが猛攻に体勢を崩す。

「今度こそ貰ったあッ！」

その隙を見逃すことなく、裂ぱくの咆哮を上げて、袈裟懸けと逆袈裟からの挟撃をかけた。だが、舶刀と手甲爪が綺麗に噛み合う。

「くれてやらん」

手甲爪の叉で舶刀をカッチリと嵌めて、淡泊な声音でカイナが口を開く。

初めて、無表情だったカイナの顔に笑みが浮んだ。

目の前を掠める、強烈な蹴り上げ。

間一髪のところ、アケットは舶刀を手放して回避する。刃物を仕込んでいたわけでもないのに、蹴りが掠めていった鎧に薄っすらと切り傷が走る。

それを見て、背筋に凍りつくような悪寒を感じた。

「まともに当たっていたら、顔が真っ二つにワワワッ……」

思わず独り言が出かけたところで、異変に気付いて顔を抑える。
はたして偶然か、それとも故意か、顔に巻いていた包帯を切られていた。

慌てて包帯を抑え、顔が露わになるのを防ぐ。

「……………」

殺し合いの最中、包帯を気にするアケットにカイナは怪訝そうな視線を送ってくる。

「来いよ。ちよいと見せられる顔じゃなくなてな。ああ、別に怪我とかでハンデを背負ってるわけじゃないからさ」

言葉の通り、アケットのコンディションは完璧だ。包帯は、単に顔を隠すための道具に過ぎない。

言い訳染みているかもしれないが、本気の戦いの渦中でも包帯だけは外せない。いや、本気ゆえに外せない、と言ったほうが適切だろう。例えば武器を奪われ、片腕が塞がっていても譲れない。

「分かった……………」

心の底から殺し合う者同士だからこそ、カイナはアケットの願いを聞き入れてくれたのだろう。

カイナが跳躍^とぶ。

アケットには、目の前からカイナが消えたように見えた。それでも、暗殺者たるカイナが、最後に獲物をどう仕留めてくるかは分かっていた。

背後に生まれ出る殺意の塊。手甲爪がランタンの灯りを照り返す。刹那の銀光。

首筋に獣の爪が食い込むかという瞬間、振り返り様にアケットが手刀を振るう。

誰もが無謀な勝負だと感じる。

吹き飛ぶ腕。

ランタンを赤く染める血。

「……………」

肘から先が無くなった二の腕だけが虚空を切り、カイナが呆然と

その結果を見送る。

「悪いね。【シーフ】なんて遣ってるけど、これでも【剣闘士】を極めた身だ」

グロディエーター

隠し玉が見事に功を奏して、アケットはこれまでに無いほど口角を吊り上げる。

【剣士】の職を極めた者が、【騎士】と【剣闘士】から選んで昇格できる職。剣の道を究めた職として、刃物を持たずとも物体を切断できる技法も存在する。

「気剣か……。カマイタチだけでこれほどの威力とは。どうやら、分が悪くなつたのは俺の方らしいな」

切り飛ばされた腕を拾い上げ、カイナがゆっくりと後退する。

「まだ終わっちゃいないぜッ！　ちィッ……」

逃がすまいとアケットが追撃をかけるが、カイナの投擲した短剣に行く手を阻まれる。

短剣を避けている隙に、カイナは客室の奥に消えてしまう。

「逃げ足の速い奴だなあ」

追いかけても利はないと考え、アケットは踵を返す。床に放り出されっぱなし船刀を拾い上げ、腰に納める。

切られた包帯を結び直してみるが、やはり取り替えないといけないうた。

とりあえず撃退することに成功したアケットは、階段を下りたところで溜息を吐いたのは言うまでもない。

「カフィーに、後でお叱りだな……」

「ああ、この馬鹿どもが悪いとしても、こっちの件だけは甘んじるよ」

アケットとジェイルは、後に落ちる雷を覚悟して食堂を出た。

その帰り道のこと、己の理解のおよばるそれに対してアケットが恐る恐る口を開く。

「……で、それは何なんだ？」

ジェイルの背中で寝こけている、純白の少女を指差して問う。

「何って、気絶しちゃったから放っておくわけにも行かないだろ。宿屋に置いとくより、俺達が連れ帰った方が安全だろうし」

「いや、娘の方はどうでも良い。問題はそっちの——」

少女を連れて行くことに關してまったく問題はない。

ただ、少女の背中に担がれている人形とも呼べない人形。

「——俺は案山子のジョニー。それ以上でもそれ以下でもない」
自らジョニーと名乗る案山子。

「さあ、な。外じゃこういうのが流行っているんだろ？」

考えるのも面倒なのか、ジェイルが素っ気無い返事を返す。

こうして、妙な出会いの夜は過ぎ去って行く。

その1

白い瞳は赤く染まり、少女の知る矮小な世界は炎に飲まれる。
白い瞳は青く染まり、少女の見る歪んだ空間は水に包まれる。
白い髪は土に汚れ、少女が遊んだ大地は崩れて隆起した。
白い髪は風に靡き、少女が駆けた草原は刈られ消失した。
白い服は焼け焦げ、少女を温めた空に雷鳴が鳴り響く。
白い服は凍り付き、少女を冷した川に氷塊が流れ着く。
白い心は射光にて、少女に注ぐ燦々とした太陽は無い。
白い心は暗黒にて、少女に笑む煌々とした月光は無い。
ただ一つの魔が、一瞬にして彼女の世界を、空間を、大地を、草原を、空を、川を、太陽を、月光を、消し去った。
膝を折る少女。

恐怖に震えた体は言うことを聞かず、哀愁で流れる涙は留まることを知らない。何かを見詰めようにも、瞳は既に光を取り込まない。永遠の闇が少女を包み込み、手に触れる全てが無機質にさえ感じる。焼けた人間の匂い、苦痛に呻く村人の声、肌を掠める冷風、口内に広がる不愉快な酸味、正面に佇む誰かの気配。残りの五感を頼りに、少女は何かを求めようと足掻く。

「……誰？　お願い、皆を助けて。私、目が見えなくて」
最初に求めたのは、前に佇む誰かの助け。

「これは貴女への贈り物」

少女の懇願を一蹴する、妙にずれた返答。

女のような声でありながら、男の声にも聞こえてしまう。

「お願い。村が、私の村が焼けちゃう……ッ」

誰かの細い足に縋り付いて、少女は助けを求める。

「無理だ。これは裁き。運命に導かれた必然。いや、もしかしたら偶然かも知れない」

「どうということ……？　どうして、どうして助けてくれないのッ？

ねえ、あなたしか居ないの！」

的を射ない誰かの言葉に、少女は絶望を覚えた。

耳朵を撫でる声は優しくもあり、そして厳しくもある。何のために、どうしてこんな世界を自分に与えたのか、少女の理解が及ぶところではない。

ただ、少女は誓った。

「許さない。絶対に、許さないッ！」

復讐を。

この闇を少女に贈った彼の者に、必ず復讐をしてやると――。

――小鳥の囀りが、夜明けを伝える。

いったい何時ごろなのかは分からないが、まだ涼しい空気が火照った体を優しく冷してくれる。光が無くとも、自分が洗いたての布団に寝転がっているのがわかる。喉の渇きが、思っているほど長く寝ていないことを知らせている。

体を優しく包み込むシーツの感触に、思わず二度目の微睡に誘おうとする。

しかし、昨夜、自分に起こったことを思い出して体を起こした。

「ああッ、こ、ここは？ 誰か、誰か居ませんかッ？」

「う、ウウ……ン。あら、起きたの？ 大丈夫、私がここに居ますから」

まるで聖母に抱かれているかのような、癒しを体現したソプラノの声が聞こえてくる。

反響する声で、そこが石造りの部屋であることを理解する。木の軋む音に、一つしかないベッドを占有していたのだと分かった。

「あ、あの……。ここは、どこですか？」

「可哀そうに、こんなところへ連れて来られて。でも、大丈夫。捕って食べようなんてことはないから」

頬を撫でるのは、少し皸た、あかぎれそれでも柔らかく温かさや冷たさを持った手の平。そして、ソプラノの声が口にした台詞で、セラスは自分の置かれた状況を察する。

男達に襲われ、助けに入ってきた二人——ジェイルとアケットに出会った。確か、ジェイルが三人を殺したところまでは覚えているならば、その後がどうなったのか。

現状から考えるに、残りの一人、相当の腕を持った襲撃者が二人を倒し——殺し——で、自分はそのままここに連れてこられた。どうして自分が殺されずに済んだのかは知らないが、男達の目的からして売春宿に売られたか、もしくは奴隷として売られるために監禁されているか。

「私の、私の所為で、二人の……。こんなことになるのなら、助けてもらわなくても良かったのに……」

己の軽率な行動に責任を痛感して、セラスは胸元を握り締めて嗚咽を漏らす。

「あ、あああ、待つてくださいッ。済みません、元気がなかったみたいなので、少しからかってしまいました。いえ、お二人は無事ですょ?」

「え?」

名も知らぬ聖母の狼狽する声に、セラスは意表を突かれて間拔けな声を出す。

「いえ、その、ですねえ。お二人——えっと、アケットさんとジェイルさんが貴女を連れてきまして、目を覚ます様子がなかったのだからこちらの部屋にご案内したんですよ。それで、何度か同じうわ言を繰り返してましたから、少し看病に、と」

「……それじゃあ、あの人達は無事なんですか? 先刻さっきのも、単なる冗談なんですか?」

「ええ、あの二人は、殺しても死ぬようなタマじゃありませんよ。良くも悪くも、素直な方なので、セラスさんは」

ようやく本当の状況を飲み込めたセラスを、ソプラノの声——たぶん、女性がクスクスと笑いを漏らす。とりあえず、第一印象はそうなってしまったらしい。

目の前の女性がどういう人物なのか、大方のところを把握したと

ところで、セラスは次に気になっていたことを尋ねる。

「それで、ここは何処なんでしょうか？」

「それについては、ゆっくりとお話しましょう。朝食を作りますから、こちらへ。あの——」

「——大丈夫です、一人で歩けますから」

助けが必要なほどではなく、女性の助けを断る。セラスは目が見えないとは思えないほどの綺麗な足取りで、ベッドから下りて手探りで壁を伝い扉の前に着く。

「凄いですね……。アケットさんやお師匠様——あ、私の師匠なのですが、お二人ぐらいになると目を瞑っていても人の位置が分かるんですのね」

「そんなに凄いことじゃありません。生きるために、目的のために、どうしても必要だったから身に着けたんです」

「目的ですか。もしかして、復讐ですか」

はつきりと、濁ることのない声音で尋ねてくる女性。

上手い具合に誘導されたことに気付き、セラスはしばし呆れと驚愕に言葉を失う。

「あ、すみません。私が気にするようなことじゃないのでしょうか、一応、聞いておきたかったもので。その、うわ言やうなされ方が尋常では無いと……」

もう、隠しても無駄なのではないか、全てを見透かされているような視線にセラスは観念した。

「分かりました。助けてもらったお礼もありますし、何も説明せずに出て行くわけにはいきませんよね」

部屋を女性と一緒に出たところで、すっかり忘れさっていた人物の声を聞く。

その2

「おう、シスター・カフィー。セラスも起きたみたいだな」

老成しているようで、どこか軽さを含んだ男の声。

「ジョニー。ごめん、心配かけたね」

「気にするな。夜中に命を狙われるよか、シスター達と一緒に居たほうが安心だろ」

彼の名前はジョニー。

山吹色の山吹帽子がチャームポイントの、藁を丸めた顔に円らかな瞳と、パツクリと空いた口が異質な、畑に佇んでいるアレ。

口が軽くてセラスに煩わしく思われるところもあるが、根は優しく、いつも彼女のことを気に掛けている。ただ、ジョニーは人間ではなく、単なる——と言つて良いのか——喋る案山子なのだ。

どうして喋れるようになったのか、セラスは知らない。けれど、この世界は広く、光を失った少女には及びも着かない事象がある。たぶん、セラスの頭に浮かんだ疑問も、そのうちの一つなのだろう。

「？ あの、シスターというのは……？」

「失礼しました。ご紹介が遅れましたが、私はこちらで修道女をさせていただいているカフィーと申します。以後、お見知りおきを」

濃紺の修道服を翻し、スカートを摘み上げたまま軽く膝を折る、礼儀正しい挨拶を交わしたカフィー。

黄金色に光るストレートのロングヘアーは、修道服のベールに隠れてしまっているが、紺碧のようなブルーアイは一つの完成した寶石を彷彿させる。

「修道女、ということとは、ここは教会なんですか？」

「いえ、元教会です。ここで神官をしていたお師匠様が、私や皆さんのために場所を貸してくれたのです。今は、少し出ていてこちらには居ませんが、またお目に掛けることができると思います」

高い天井や、窓の代わりに光を取り入れるステンドグラス。カフィーの言う通り、どことなく教会の形を残した作りになっている。どうやら色々と事情があるようだが、紳士のジョニーは深く突っ込むことはしない。

ただ、その前にセラスの事情を話すのが先か。

「積もるお話もあるでしょうけれど、朝食を作りますのでこちらへ」口を開くよりもはやく、セラスがカフィーに促されて椅子を進められる。

近づくにつれて鼻腔を突くアルコールの匂いに、訝しげに表情を歪めるセラス。手が触れた先にあるのは、長く伸びた机。教会を改修したものらしく、ここに住む住人の趣味で小さなバーになっている。

カフィーはカウンターと思しき机の向こうに回り、朝食の準備を始める。

「さて、改めて紹介しようか。二人ばかり欠けているが、あの二人は後でも良い」

セラスが席に着いたところで、聞き覚えのある声が聞こえてくる。これも改修した成果か、広い天井を利用して寝泊りするための個室を造つてある。セラスが先ほどまで寝ていた部屋は、懺悔室を改修して作つた予備の部屋らしい。

木の軋む音を響かせて、アケットとジェイルが階段を下りてくる。「確か、アケットさん、でしたよね？ 昨日はどうもありがとうございませう」

「なんだ、もう知っていたのか。ジェイルにでも聞いたのか？」

「いえ、お二人が話しているのを聞いて、覚えただけです。ジェイルさんも、ご一緒ですか？」

「ああ、ここにいる。改めて、よろしく」

「セラスです。よろしくおねがいます」

口々に自己紹介を終えたセラス達。

そこで、また妙な疑問が浮かんできたようだ。

先刻から、一時の世話では済まないような言い様が続けている。

「……？」

女の勘と言うべきか、嫌な予感を感じ取るのは素早い。

「なんだ、シスター・カフィーに聞いてなかったのか？」

「あ、済みません。重要なことを聞いていませんでしたね。それと、カフィーだけでかまいませんよ、ジョニーさん」

「おっと、こいつは失礼。礼節を欠くのは、紳士として恥ずべきものだからな」

「何で、二人だけで話を進めてるのツ？ 説明してくださいよ！」
なかなか進まない話に、セラスが焦れ始める。

その疑問に答えたのは、セラスの隣に座ったアケットだ。

「お嬢さんには、今日からここ——『《ヌル》』で働いてもらおうと思ってるんだ」

単刀直入すぎるのはアケットの悪いところだが、セラスにはこれぐらいが丁度良いのではなからうか。

「え、え、ええええええええええええええええ——」

「落ち着け。もちろん、強制するつもりはない。ただ、こちらも人手が足らなくてなあ、昨晚の件も考えれば君をスカウトしたいところなんだ」

狼狽するセラスを宥め、アケットが言葉を続ける。

驚きすぎて酸欠になりかけたセラスは、しばらく金魚のように口を開閉し続ける。

「返事は——まあ、昨晚の件の話をつけるまでに考えておいてくれれば良い。その間、働かざるもの喰うべからず、ってことでしばらくは見回りなんかを手伝って欲しいんだ」

喋れないことを良いことに、アケットが話を進めていってしまう。
セラスはカフィーから水の入ったグラスを受け取り、落ち着きを取り戻しはじめる。

「あ、の、どうして、急にそんな話が、出てきたんですか？」

「いやあ、それもご尤もな話。でも、昨晚のことを考えれば……う、

うん、俺達が悪いところも少しはあったが、下手に君をこの街に留めておくのは危ない。そう考えたんだ。そういうのも、昨晚の奴らは『バンガード』って言う、この街の売春宿を仕切る組織なんだ。そのボスがこれまたしつこい奴で、今回の件を帳消しにする代わりに色々と条件をつけてきてなあ。その返事を、昼頃にしてくるつもりなんだわ」

「それで、どうして私がお手伝いをする、なんて話しに？」

「待て待て、話は最後まで聞いてくれ。その条件というのが、別の組織が取り仕切る武器密輸の権利を手渡すか、俺達がこの街を出て行くか、という無茶振りも良いところなんだよ」

アケットの説明を聞いて、セラスは啞然とした表情を浮かべる。

調停を担うアケット達にとって、この街を出て行くのは掟の欠如を意味する。しかし、前者の条件にしても、別の組織に対してそんな申し出をできるわけがないのだ。

ことの一端がセラスにもある以上、ここで断るといふのは仁義に欠ける。ある種の諦観に似た気持ちで、セラスは溜息と同時に首肯を返した。

「すまん、な。さて、話も付いたところで、俺は少し出かける。ジエイル、セラスに大まかな仕事を教えてやれ。要件が済み次第、俺も合流する」

「分かった。だが、一人で大丈夫か？ 妙に『バンガード』の奴らいきり立つてるからよ」

「俺があんな奴らに遅れを取ると思うか？ 馬鹿にされた気分で心外だなあ」

なんともアケットの自身ありげな言葉。

ただ、セラスは安心していない表情で言う。

「アケットさんも、女性なんですからあまり無茶をしないで下さいね」

その瞬間、何故か周囲の気温だけが絶対零度を記録する。

『……………』

アケット本人を含め、ジェイルも、カフィーさえも目を見開いてセラスを凝視する。異様な表情が三つも並ぶと、こんな空気ではなければ大爆笑していたに違いない。そんなことを思っていると、ジョニーは引っ搦まれてセラスも同じくしてジェイルに外へ連れ出される。

その2（後書き）

どうしてでしょうねえ。

いえ、『盲目の復讐者』に関して言えば、『羊の鎧を着た狼の戦場』に比べて人気がないようです。まあ、二番目の連載である上に、ありふれたファンタジ物なのでそれも仕方ないことなのかもしれない。

でも、更新した日でさえ200PVを越えないってどういうことよ？

やっぱり、題名か？ 題名が、『くのゝ』じゃ興味が湧かないのか？ そんな理由で改題とかしたくないんですけど、この調子じゃ考え物ですよ。

もしかして、ラジオコーナーみたいなのをした方が良かったのかなあ。

つと、愚痴の絶えない後書きでした。それでは、また次回もお楽しみに。

その3

ジェイルに外へ連れ出され、しばらく人が疎らな道を進んだところで、ようやくセラスとジョニーは解放された。

「……はあ、はあ」

肩で息をしながら呼吸を整えるジェイル。

正直、どうしてジェイルがそんなに慌てたのかセラス達には検討が付かない。

「あの、私、何か悪いことでも言いましたか？」

恐る恐る、セラスはジェイルに問いかける。

自信過剰というわけでもなかるうが、それでもアケットのことを心配したのが悪いことだったろうか。いや、もしかしたらもっと根底にある何かに触れてしまったのではないか。

「お前、どうしてアケットが女だと分かった？」

呼吸を整え終わったジェイルが、やっとのことで紡いだのはその問。

急にそれがどうしたというのか、セラスにはしばらく理解ができなかった。

「いえ、ただ、男のような喋り方をしている、やっぱり声や雰囲気、他には宿屋で助けられた時に男性とは違う匂い——とでも言うんでしょうか、そうしたもので……」

目が見えない分、大方の本質を見抜く力が磨かれている。目で見て分からないことも、他の五感が補ってくれる。

故に、男のフリをしたアケットの本質を見抜けたのだ。

「悪いというわけじゃないんだが、アケットは自分が女であることを嫌っている、って言うて酷い言い方だろうな。けど、目指すものが目指すものである以上、女伊達らになめられたくないって言うのが本心だ」

それを聞いて、セラスは自分の言葉の重みに気付く。

例えそれが事実だとしても、世の中には口にして良いことと悪いことがある。今回は、完璧にその辺りの配慮を怠ったセラスの失敗だろう。

「そう、だったんですか……。私、謝ってきますッ」

「止めとけ。まだ、あれは正体がばれたことを驚いていた顔だ。怒っちゃいないから、行くだけ逆効果だよ」

ジェイルに制止され、セラスは戻ろうとしていた足を止める。

留めてきたジェイルの言葉に嘘はなく、セラスもアケットから驚きこそ感じて怒りは感じなかった。それに、セラスよりもアケットのことを知るジェイルが言うのだから、怒っていないというのは確かなのだろう。

「分かりました。では、ちょっと街を見て回りましょう。ご教授、お願いしますッ」

今はアケットのことを置いて、自分のすべきことを考える。

こうして、少女は一日目の仕事を始めた。

最初は、特に何をするでもなく街を回って、住民との交流を深めながら派閥同士の抗争が起こっていないかを確かめる。

ジェイルの話によると、現在は『《ヌル》』と『バンガード』の争いを除けば大きな問題は起きていない。このまま穏便に事が済めば助かるらしいが、下手をすれば『』が他の派閥を敵に回し、全面戦争という形になりかねないとか。

「今、この街で名を上げているのは五個の派閥だ。一応、『』も含まれるが、それを除いて簡単に説明しておく」

「えっと、確か『バンガード』というのが娼婦や売春宿を纏めているんじゃないね」

「ああ。それから、武具の密輸なんかをしているのが『アバレスト』という派閥がある。次に、麻薬やら非法法の薬を配っているのが『メルディシヤス』だ。最後に、カジノや賭場を営んでいる『カウガ』かな」

「で、大方、『バンガード』と『メルディシヤス』が手を組んでい

て、『アバレスト』と『カウガ』当りが協力し合う形で経済的、戦力的なバランスを取ってるっていう状況か」

「大当たりだ、ジョニー。付け加えるなら、『』は『メルディシヤス』と『カウガ』と仲が良い。武器密輸のために、王国軍や盗賊から護衛したり、大きな賭場が開かれた時は俺達がボディガードに入ったり、手助けしてる」

一通りの説明を聞き、『ハイオン』がどのような状況なのか把握する。

たぶん、ジェイル達も無意味に『バンガード』と事を構えたいとは思っていないのだろう。ただ、『バンガード』の自分勝手な行動が——と言うよりも実質的な『ハイオン』の支配権を得たいがために、『』との睨み合いに発展してしまったのだろう。

しかし、思うところもある。

この無法地帯である『ハイオン』を、一つの組織が支配したところで何らかの利があるのだろうか。確かに、莫大な金が手元に転がり込んでくるわけだが、『ハイオン』の歴史を考えれば愚直な利益だ。

「昔は、一つの組織が統括していた。けれど、その所為で派閥ができて、お互いに睨み合う形になってしまった。それじゃあ、また同じことを繰り返すのでは？」

「おおーと、その辺についてはこの生き字引、ジョニー様が説明してやるぜッ！」

セラスの抱いた疑問に、ジョニーが口を割って入れてくる。

「それはなあ、この世界に広がる四大陸に、魔王という名の邪悪が現れたからさあ。もとは『ハイオン』が所属する双竜の大陸（ガルニス）を支配する王国『ガルニス』の直轄地としてあったのが、魔王の誕生と共に無法地帯を手放した。王国軍からも、周囲の領主からも見放された背徳都市は、更にその無秩序を加速させたわけだ。

ただ、もしどこかの組織が『ハイオン』を統括して、王国の直轄地に戻るようなことがあれば……」

「その組織が、「ハイオン」の領主として名乗りを上げることができ……ってこと」

ジョニーの言葉を継いだジェイルの台詞で説明を終える。

「あれ？ でも、魔王云々というのは単なる説話なんじゃありませんでしたか？ 今から百年以上も前に、魔王が世界を震撼させて空を闇に覆った。という話ですよ？ 何十人という歴戦の勇士達が魔王を討伐して、世界に平和が戻った。でも、一つの街を一薙ぎで破壊できる巨大な魔物なんて、俄かに信じられませんか」

祖父母から聞いていた伝記譚を思い出し、嘲笑めいた笑いを漏らしてしまう。

そんなセラスの言葉に応えたのは、背後から聞こえてくる聞き覚えのない声だった。優しさを含んだ、この街では珍しい温和な男声。「いえ、確かに半分は説話ですが、魔王は実在しました。僕も説話でしか聞いたことはありませんが、魔王が居たという根拠は世界中に残されています」

誰か、と思い振り返ってみても、目の見えないセラスには何処の誰かなど分かるわけがない。

「おお、ラットル。儲かってるか？」

「ご無沙汰しています、ジェイルさん。まあ、ボチボチと言ったところでしょうか」

ジェイルがラットルと呼ぶ青年。

「そうか。おっと、紹介が遅れたな。こっちは、新しく内で働くことになったセラスだ。訳有りで目が不自由なんだが、気にしないでやってくれ。それから、こっちが付き人の——」

「——俺は案山子のジョニー。それ以上でもそれ以下でもねえ」

「ご紹介、承りましてありがとうございます。僕はラットル。この街の『アバレスト』と言う組織で【具学師】として働く者です」

一通りの自己紹介を淡々と終える。

【具学師】というのは、武具や道具の識別、または管理を主とする職のことだ。

「ラットルは、『アバレスト』でも随一の【具学師】で、な。武器の運搬なんかの、護衛をたまに引き受けるんだよ。うん？　もしかして、今回もその件か？」

「はい。随一というのは、少し言い過ぎだと思いますが……護衛のお仕事を頼みたく、探していました。今回は、港町「イルトニア」まで密輸品を運搬するのが仕事です」

「それなら、カフィーに伝えておいてくれれば良いのによ。急ぎなのか？」

「一応、お訪ねしたんですが。アケットさんの驚き様を見たのでは……」

そんなジェイルとラットルの会話を聞いていると、セラスの心の底で何かが疼く。自分にはない何かをジェイルに感じ、それを良いことに彼を欺いているラットル。ジェイルを、このまま黙って放っておくわけには行かない、そんな言い知れぬ不安だった。

その3（後書き）

はたして、アケットが男だと思っていた読者様は何人ほどいらっ
しゃったでしょうか？

たぶん、これまでにアケットの三人称を『彼女』や『女性』と表
記した記憶はないので、別に嘘をついていたわけじゃありませんよ。
さてさて、アケットが女だとわかったところで、何人かの読者様は
考えていらっしやるでしょう。

そう、これから少しずつアケットとセラス、ジェイルの三角関係
が……。ああ、別に昼ドラマみたいな修羅場にはならないので期待す
るだけ無駄ですよ？

そんなわけで、更新遅れてごめんなさいです。
では、次回の更新は来週になりそう……。

その4

今まで、様々な街や村を旅して周り、路銀を稼ぐためにできる限りの仕事をこなしてきた。そんな中で身についた、お金への執着心。「あの、この仕事って幾らぐらいで引き受けるんですか？」

ジェイルとラットルに詰め寄るセラス。

背中ではジョニーが、またか、と言わんばかりに溜息を吐く。

「え、まあ、俺とアケットが引き受けて……距離にもよるが、目的地までとの往復の宿代や食糧の代金で考えるからなあ。一概に幾ら、つてのは決まってるんだわ。なあ、ラットル？」

「そうですね。たぶん、今回は徒歩で「イルトニア」まで、十日ほどの道のりになりますから……」

しばしの計算の時間を置き、ラットルが護衛代金を口にする。

「金貨二十枚と言ったところ——」

「——馬鹿言わないでくださいッ！ 確かに寝泊りや食事の分だけならそれで済むかも知れませんが、身に及ぶ危険の手当てなんかを含めれば、金貨五十枚ぐらいが妥当でしょう？ 例えジェイルさんとアケットさんが担当したとしても、それぐらいの権利は当然のことですよ。あ、それから、今回、運搬する武具のリストを見せてください。ジェイルさん、読み上げて」

ラットルの言葉を遮ってまで、セラスはそう捲くし立てた。その上で、ラットルから武具のリストを掻っ攫い内容を確認する。

「えっと……黒金の大陸「アレキドル」産の鉄鋼原石が七十キロ。

刀剣類が三十ダースほど。薬草の類が計十キロばかり、だ」

リストの内容を読み上げていくジェイル。

全体を通して、相当量になる。それに、鉄鋼原石は原産地以外で輸出入にキロ十金貨もの関税が掛けられる。薬草類にしても、物によればピンからキリまでの関税が掛かる。刀剣類と纏めたが、中には一本で金貨数十枚に及ぶ価値の物や、運搬だけで許可のない商

業人なら役人に捕まってしまう。

王国軍から盗賊、山中などの魔物の襲撃を考えれば、往復分の必要経費だけで報酬を決算するのは間違えているのだ。

「ほら、金貨百枚で護衛を雇ってもお釣りが来る荷物じゃないですか。私の目の黒い内は、きっちり依頼料を算出さえてもらいますからねッ」

「は、ははは…… 敵いませんねえ。分かりました。依頼料の方はセラスさんと相談の上で決めさせていただきます。今まで安く引き受けて貰った分、少しぐらいは色をお付けします」

ラットルもセラスの気迫に押し負けて、依頼料の吊り上げを快諾してくれる。

「しかし、今回はいつもより荷物が多いな。大口の注文でも入ったのか？」

「はい。やみあかり闇灯の大陸（ムーニア）の首都から注文が来まして、馬車で三台分になってしまいました。できれば、二人ほど馬車の扱いができる方がいらつしゃるとたすかるんですが。ジェイルさんは――」

「――無理ッ」

何故か即答するジェイル。

どうも、心臓の拍動から馬車に対してのトラウマがあるようだ。

「荷車に乗るぐらいなら構わないんだが、どうも動物とは相性が悪くてなあ。アケットに任せると、どんな暴走をするか分かったものじゃないし、よ…… っとなると」

「誰が暴走するだ？」

ジェイルが思案に移った瞬間、どこからともなくアケットの音が響く。

「ひゃうッ！」

ジェイルらしからぬ悲鳴を上げて、その場から飛び退く。いつの間に来ていたのか、腕を組んだ不機嫌な声音のアケットがジェイルの背後にいた。

「そりゃ、手綱なんて一度も握ったことがないから、上手く操れる

か分からんさ。もちろん、安全に荷物を送り届けるためなら身を引くことも敵わん。そうなるよ。』にはカフィーと生臭神父ぐらいしか残らない。流石にカフィーだけじゃ不安だから、俺とジェイルもついていくとして、後の一台はどうする？」

修道女のカフィーが馬の扱いができるとは驚きだが、ここに一人だけ忘れ去られた人物がいる。勝手にできないものと判断されるのは遺憾ながら、これでも路銀稼ぎに駅馬車の仕事も手伝ったことがあった。

「私でよければやりますけど？」

『えッ？』

ジェイルとアケット、ラットルまで一様に声を重ねて驚く。

目が見えないからと言って手綱が操れないわけではない。速度の調整さえ分ければ、障害物等に対しては馬の方が判断してくれるのである。故に、セラスが名乗りを挙げた。

三人は顔を見合わせてアイコンタクトを取り合い、しばらくの逡巡を置いてうなずく。

「護衛が四人というのは少し多いですけど、仕方ありませんね。では、必要経費として前金に金貨百枚でお願いできますか？ 後の報酬は、こちらに戻ってこれた時にお支払いします」

こうして、初日にしてセラスは護衛の仕事を手伝うことになった。彼女達が街を出発したのは、準備を整える時間を考慮した上で一時間ほどあとのことである。

ちなみに、どうしてアケットがあこの時間にあの場所にいたか、と言うと。思いの他、話が早く片付いたからとのことだ。ただし、良い方向で片付いたのならば安心できた。

「セラスを守るためには言え、悪いのは『バンガード』の奴らだ。要求を突っ撥ねてやったら、案の定というか、敵意剥き出しで『覚悟しておけよ』の捨て台詞だぜ。あつははははははッ」

「笑い事じゃないだろ……。どうするんだ？ 『バンガード』と全面戦争なんてことになったら、この街だって無事じゃ済まないだろ」

何も面白いことではないというのに、気楽なアケットに誰もが呆れる。

ジェイルの言葉に、包帯で隠れた表情こそ分らないものの、アケットが元から細い目を更に細めた。

「なあ、お前は大事なことを忘れてるぞ。俺達は街の中立を守っているが、正義のヒーローを気取ってるわけじゃないんだ。自分の命が危なくなったら、例え依頼クライアントされていても依頼人を見捨てる。仲間であるお前らだって、自分の命に代えれば安いものだと思うてる。それを忘れるな」

『……………』

決してアケットの言葉が真理ではないにしろ、何が正しいかなど「ハイオン」という街では無意味な議論だ。

だから、ラトルを含め『』のメンバーは反論の言葉がなかった。

どうしてそれを今、ここで口にしたのかは分からない。

「なに抜けた顔をしてんだ？ 冗談だよ、冗談。守るって決めたものを放り出せるほど、俺は悪党やってないぜ。それに、この街で戦争をしなけりや良いだけの話だろ？ なあ、優しい悪人さん」

急に破顔して、アケットがセラスやジェイルの肩を叩く。

その声音は、出会った時と同じ優しい他人事のような声だった。

傍若無人で、いつも身勝手に暴れまわる、「ハイオン」の顔無き女剣士アケットの声である。

囁くように誤魔化してはいるが、セラスの心には小さな疑念が残る。もしかしたら、本当にアケットは誰かを命と引き換えに差し出すかもしれない。そんな気が、鎧に包まれた背中から感じられた。

その4（後書き）

序盤から飛ばし過ぎた所為か、やや二章が冗長になってしまふ。

そして、読者がまったく増えないという罫。

ありきたりな設定が駄目なのか？ ありきたりな題名がだめなの

か？ 愚痴っても仕方ない今日この頃。地道にがんばりますか……？

その5

密輸品の護衛という仕事は、意外にも順調な旅路を見せる。

人通りが多い街道も通れば、役人や王国軍を警戒して裏道に行くこともあった。しかし、どちらにも遭うことがなければ、山賊等の襲撃を受けることもなく八日目の夜が訪れる。

計画よりも順調な旅路に一向は一日ほど早い到着を見込む。その日は農村さえ見つけることはできなかったものの、これまでも野宿を経験したことがあったために不満はもれなかった。

「今日はここで野営と行こう。見張りは、三時間ごとで交代だ。最初は――」

「――では、私が。御者しかしていませんから、それほど疲れていませんし」

森林の開けた場所を野営地を決めると、率先してセラスが最初の見張りを名乗り出てくれた。

きつと、初めての仕事で役に立とうとしてくれているのだろうが、新人にあまり酷な仕事は任せたくない。そんなわけで、最初の見張りはアケットとセラスに決まる。

「次はジェイルとカフィーだな。依頼主^{クライアント}に任せるのもなんだが、明け方の二時間ばかりはお願いしても良いか？」

「分かりました。では、それまでゆっくり休ませていただきますね」「了解。しつかり頼むぜ、新人君」

「僕は構いませんよ。道具の研究で、徹夜でも大丈夫ですから」順番を決め終え、アケットとセラスを残して三人が眠りに着く。

屈強な背徳都市の住人達とは言っても、八日間に及ぶ旅は意外に体力を削っていた。そのためか三人は数分で眠りにつき、静かな寝息を立て始める。

アケットは、疲れているのを押し隠して頑張るセラスにカーフィー豆の煎り薬を入れてやる。薬と名前が付いていながら、実のところ

は単なる飲み物だ。確かに、神経の高揚を抑える効果はある。

「ほら、あまり気を張っていると疲れるぞ」

「ありがとうございます。本当は私、今回の旅がとても楽しいんです。ずっとジヨニーとだけ旅をしてきて、つまらなくはなかったけれど、途中から真新しいものが感じられなくて……」

なにを感慨に更けてしまっているのか、セラスがポツポツと語り出す。

正直、セラスは自分達から見ればまだ若い。というのもおかしいか、アケットさえジェイルより一つか二つ上で、ジェイルがセラスの一つ年上ぐらいだ。精神的な面にしても、苦境に携わってきた期間はそれほど変わらない。

「分からなくてもないが、それでも俺達より世界を見てきたんだろ？ 色んな街を回って——ああ、この話はカフィーから聞いたんだが、仇の相手を探してるんだって？」

突っ込んで言い話なのか分からなかったものの、その話を聞いた時から気になっていた。

セラスの曇った表情が、焚き火の灯りに照らされる。

「……はい。街に居た時に話そうと思っていましたが、アケットさんのことを言ってしまったこともあって、ついつい言いそびれてしまいました」

「そのことなら、気にしてねえよ。単に驚いただけで、こいつを取らずに女だって気付いた奴は今までに居なかった」

本当のことだ。

自分やジェイルとは違う鋭さを持っているとは思っていたし、何も話していない事情を暴かれたからと言って怒るほど度量の狭い人間ではない。

それはそれとして、今はセラスの事情を聞いてみたかった。

「で、仇っていうのはどんな奴なんだ？ やっぱ、「ハイオン」に来たのも手がかりがあったからなんだろ？ もしかしたら、俺達が知っている奴かも知れねえ」

「どんな、と言われても上手く答えられないんです。話をした時にはもう目が見えなかったし、その時は今ほど感覚も鋭くなかったの……ただ、一度の魔術で全ての属性を発動できるんです。本当に、地面を虹が走ったようにしか見えませんでした」

辛いだろつが、それでも気丈に語ってくれるセラス。

しかし、申し訳ないことに、アケットはそんな魔術を使える人物を知らない。数年でありながらも「ハイオン」にいるほとんどの人物像を把握しているが、何処の組織にもそれほどの優れた——というより、そんな魔術さえ聞いたことがなかった。

「一度に、全ての属性を？ 相当、上位の魔術だな。上位職か、最上位職だろうが、「ハイオン」にもそれぐらいの実力者は片手の指だけで数え切れる」

「私ではなく、ジョニーが可能性を耳にしたんです。とんでもない魔術師が居ると」

職には、通常の人間が就く社会的な職に加え、力を得るための職がある。

その内の基本的な五種を下位職とし、そこから各々に二つの職が中位職として存在する。そして、各種の中位職二つを極めた者が上位職へ昇格できる。最上位職というのは、中位職の中から特定の組み合わせで職を極めた者が昇格できるのだが、それを極めている者は数少ない。その最もな理由は、職という神々の加護が宣託されてからも解き明かされた組み合わせが少ないこと、ほとんどが本質の異なる職同士ゆえに最上位職を選ぶものが少ないのだ。

故に、誰もが情報をひた隠しにする。最上位職の者の情報を得るのも一苦勞なのである。

「まあ、『』に居れば色々と情報が手に入るから、しばらくはお手伝い感覚で頼む。時化した話はこれぐらいにして、セラスは【魔法使い】だよな？ その後はなにをするつもりなんだ？」

これ以上は落ち込ませたくはなく、アケットは別の話を振る。

現在、セラスが極めようとしているのは【魔法使い】の職だ。次

に選べるのは【魔術師】か【呪術師】のどちらか。途中で自分の肌に合わないと感じない限り、別の職を選ぶことはないだろう。

「私は、【魔術師】にしようと思います。【呪術師】って、なんだかネチネチとした感じがしません？ ふふふッ」

振った話題に食いつき、セラスの顔に笑顔が戻る。

ちなみに、この世界の魔の体系には『魔法』と『魔術』がある。

前者は、魔の法則を生み出すもので、火、水、風、土の四元素の形状を変えずに扱う魔の体系を指す。後者は、文字通り魔を扱う術^{すべ}であり、形状の変化や指向性を組み込むことができる。それに加え、闇、光、雷、氷の『異種元素』と人々が呼ぶものが使えるようになる。

闇や光は四元素に含まれず、雷は炎と風、氷は水の形状変化が主とするため、そう呼ばれているとか。

「仇のことを意識しているのか？ 確かに、剣で魔法や魔術を相手にするのは辛いな」

「ええ、私はあまり力がありませんから、魔法が長距離用の武器くらいしかありません。長距離武器では、荷物が嵩むと思ったので【魔法使い】にしまっくんぐッ——」

アケットは、周囲に漂い始めた気配に気付き、慌ててセラスの口を塞ぐ。

「——シィッ。どうやら、少し話しに花を咲かせ過ぎたみたいだ。蜜の香に誘われて、羽虫どもが寄つてきやがった」

本当なら、野営地の周りを囲まれた時点で気付いているはずだ。

しかし、話し込んでいたのと、カーフの濃い香の所為で感覚を鈍らせていた。

「風上を取られたか……。セラス、急いでジェイルとカフィーを起こしてくれ」

「十……二十？ いえ、五十匹は居ますね」

セラスも、風上に並ぶ大所帯に気付き、指示通りにジェイルとカフィーを起こしに向かう。疲れてさえいなければ、二人も周囲の気

配で目を覚ましていたのだろう。これだから、旅という奴は何が起ころのか判断が付き難い。

「ジェイルさん、カフィーさん。起きてください」

声を潜めて、二人の肩を揺する。

「う、うゝん……。なんだ、もう交代の時間か？」

「静かに。すみません、敵に囲まれてしまいました」

セラスが二人を起こしている間、アケットは二本の舶刀を抜き放つてお客さん達に挨拶へ向かう。

気配からして、人間や野獣ではなさそうだ。

魔物と呼ばれる類の、凶暴な襲撃者達であろう。

魔物とは、それが果たしてどんな存在なのか、まったく研究が進んでいない生態。魔王という魔物の長が居た時代には、我が物顔で人々を襲っていたが、今では野山に出現して己らの領土を主張するか餌を求めて旅人を襲うか、どちらかである。

そして、茂みの中から姿を現したのは、醜い二足歩行の豚だった。吊り上った大きな鼻に、澱んだ目。口から垂れ流された涎が、旅人から奪ったものであるう檻褸切れのような鎧を滑る。手には、棍棒やら錆びた銅剣やら、^{ブロンドソード}纏まりのない武器を持っている。

刺激せずに、このままどこかへ行ってくればよかったものを、どうやらアケット達は完全に敵として認識されてしまったらしい。

「ああ、豚ちゃん達か。こんな夜更けに来て、食べ物はないぜ？」

お家に帰りなッ！」

その5（後書き）

遅くなつてごめんなさい。クソまみれになりながら夏をエンジョイしているために、なかなか書きあげた今章を投稿できませんでした。

ああ、もちろんクソまみれと言っても、そういうキワモノの話じゃありませんよ？ 勘違いした人は煩惱を頭から叩き出してきてくださいな。

炎天下の中、牛フンの堆肥の発酵熱が体を苛む。そんな今日この頃。汚物は消毒だぁッーーーー！！

その6

アケットの声を合図に、豚——ゴブリンどもが一斉に攻めかかって来る。

『うがああああああああ——ッ』

怒声ともつかぬ声を張り上げ、焦げ茶色の波が茂みを割って流れ込んできた。

アケットが正面の一团に切り掛かり、棍棒を受け流しながら鎧ごと膨らんだ腹部を一文字に切り裂く。振り向き様に、背後から肉迫した一匹を屠る。白かった包帯は赤く染まり、鎧を血の雨に濡らしながら剣士は踊る。

五匹のゴブリンがジェイルを取り囲む。完璧とは言い切れないものの、それなりに統制の取れた動きで各個撃破を狙っているのだろう。が、抜き放ったハーケンの一薙ぎで二匹を串刺しにして、残りの三匹を樹木へと叩きつける。

ジェイルが吹き飛ばしたゴブリンを、今度はセラスが魔法で仕留めて行く。ウッドフンド木製杖の先端に生み出された炎で焼き、大地から削り取った飛礫をぶつけ、風の衝撃で昏倒させた。

ラットルはと言うと、一匹のゴブリン相手に小枝で怯えながらも交戦している。

「はぁッ」

裂帛というには程遠い掛け声と同時に、ラットルに集中していたゴブリンを銀槍で突くカフィー。シルバーランス

戦い方は師匠に習ったものの、やはり戦い向きではない【神官】の職である上に女性の力では、分厚い肉の塊を軽く傷つけるのが精一杯だった。

「ぐああッ」

「きゃぁッ……」

横腹に刺さった銀槍を棍棒で弾かれ、カフィーは痺れるような痛

みに怯む。銀槍を取り落としてしまい、ゆつくりとゴブリンに間を詰められる。

ジリジリと、醜悪な顔が迫る。

普通の【神官】ならここで怯えて身動きができなくなるが、カフィーはそんなに脆弱な修道女ではない。

「戦う修道女を舐めないでくださいッ」

手の平に生み出した悪霊を浄化する光で、暗闇に慣れたゴブリンの瞳を焼き潰す。

「ぐぎやあああああああああああああああああぎやッ

……」

目が眩んでいる間に、銀槍を拾って腹部を一気に貫く。

しばらくもがき苦しんだ後、腕に伝わる重量感で事切れたのが分かる。

「……ほッ。助かりました、カフィーさん。それにしても、修道女の貴方が魔物とは言え命を奪って良いものなんですか？」

安堵の息を吐いたラトルが、最もな疑問をぶつけてくる。

確かに、この世界で信仰される宗教は、例を漏れず命の尊さを謳っている。しかし、カフィーが信仰するのは偶像的な神々ではない。「私が信仰するのは、人間です。いつの世も、人間に救われ、人間に傷つけられるんです。師匠の受け売りですけどね」

故に、命とは奪うか奪われるか。

「はぁ。でも、やっぱり命を奪うのは慣れませんね……」

僅かな間の戦いとはいえ、疲労の色は隠せずカフィーは地面に尻餅を付く。

離れたところでは、アケットやジェイル、セラスがほとんどのゴブリン達を屍に変えていた。ただ、敵わないと分かっているいつまでも襲い掛かってくるゴブリン達に疑問を感じる。

縄張りを主張しながらも、強力な敵の場合は身を引くことも知っている魔物達だ。不定形生物スライムのような知性のない魔物ならまだしも、これほどまでに食い下がるのはあまり無いことである。

「おかしいですね。私達を別の魔物か何かだと勘違いしたんでしょうか？」

「でも、アケットさんやセラスさんが、態々、魔物の群れに殺氣をぶつけるようなことはしないですよね？」

ラットルも同じことを考えていた。

そして、考えている間にゴブリンの大群を殲滅し終える。

「なんだから足りないなあ」

ゴブリンの屍の山を踏みつけ、アケットがポツリと呟く。

「足りないって、これだけ暴れば充分だろ？ もう交代の時間だつてえのに、元気な姉ぐふッ——」

「——アケットと呼べ、って言っているだろ。とりあえず、ここから早く離れた方が良さそうだ」

言っではならない台詞を制止させられるジエイル。

「そうですね……あまり長居しない方が良いと思います」

アケットも何かを感じたのか、夜も明けぬうちに出発の準備を始める。

カフィー達もそれに倣い、荷物を纏めて馬車を走らせる。ひたすら手綱を振るい、目的地に着いたのは街人達が目覚め始める頃だった。

港町「イルトニア」。基本は漁港から成り立ち、貿易路や観光に力を入れたのどかな漁村である。街の規模はそれほど大きくないものの、溢れ返る活気や長閑さならば王国「ガルニルス」にも劣らぬ。「少し早いですが、僕は注文の品を届けてきます。港の方にいると思いますので、何かあればそちらに来てください。後は、ゆっくり観光でもしていただければ良いので」

「イルトニア」について直ぐに、ラットルは三台の馬車を引いて港へ向かう。

取り残された『《ヌル》』のメンバーは、手持ち無沙汰になったため朝の漁港を見回ることにした。活気に溢れた港の市場は、珍しい魚介類に限らず骨董品なども置かれている。

色とりどりの垂れ幕、焼けた肌の漁師や店主達。

こんな光景を見ていると、やはり人間というのは醜くもあり美しいとも感じる。

「へえ、気持ち悪い魚なのに、食べられる物なんですね」

「朝の市場なんて「ハイオン」でしか見たことが無かったが、場所によつてこんなにも変わるもんなんだな」

「おい、セラス。楽しむのも良いが、転ぶなよ」

「こつちまで足を伸ばしたのは初めてだからなあ。海なんて、セラスは今まで見たことが無いって言ってたが」

セラスが石畳の道を駆け抜け、アケットが街の様子に感心し、ジエイルが呆れながらも目を輝かせ、ジョニーは感慨深く呟く。

いずれ時間ができれば、こうして皆と一緒に旅行へ行くのも悪くは無いだろう。ただ、今は『バンガード』との一件もあり、しばらくの間は背徳都市に平和など訪れないだろう。

そんな考えが、まさか意外な形で訪れようと、カフィーに想像できただろうか。いや、この場に居る誰もが海を渡る旅など考えもしなかった。

「きやあッ」

唐突にセラスの悲鳴が上がり、物思いに更けていた皆が意識を連れ戻す。

悲鳴の聞こえた方を見ると、セラスが石畳に尻餅をついて、もがくように後退ろうとしている。単に転んだだけではなく、セラスの前には黒装束の人物が佇んでいる。

「カイナ……」

黒装束が何者か問おうとするよりも早く、アケットが呆れた声音で呟いた。

セラスを助けた時に刃を交えた暗殺者の名は、アケットから聞いている。まさか、【アサシン】であり暗殺を生業とする人物が、こんな白昼堂々と姿を現すとは思って居なかった。

もちろん、市場はカイナの投げたナイフの一刀で騒然となってい

る。

「大丈夫か、セラス？ すまん、ちゃんと言っておくべきだったな」
その中で、アケットだけはカイナの追跡に気付いていたようだ。

一度覚えた気配を、剣の道を歩むアケットが忘れるわけがない。
たぶん、「ハイオン」で合流したところから、既につけられている
のに気付いていたのだろう。

「ジェイル、カフィー。セラスを頼む。合図をしたら、一気に港ま
で走り抜ける」

耳元でアケットが囁き、ゆっくりと舶刀に手を掛ける。

緊迫した空気が流れ始め、アケットとカイナの間地点で殺気同
士がぶつかり合う。火花だとか、雷なんて表現が生温い不可視と無
感の衝撃が荒れ狂う。

「行けえッ！」

駆け出すと同時にアケットが叫ぶ。

それを合図にジェイルがセラスを担ぎ上げ、カイナの隣を駆け抜
けた。

その1

細波の音を頼りに港町を駆け回る。

ジェイルはセラスを抱え、カフィーの直ぐ後ろを走っている。その後ろでは、アケットがカイナと交戦しながら徐々に距離を港に近づける。

後退しながらの応戦はアケットにも難となるのか、何度も体勢を崩しながら辛うじてカイナの投擲する短剣を弾き落とし、避け続けていた。時には舶刀と手甲爪を打ち合い、必死に時間を稼いでくれている。

ジェイルはアケットを助けに行きたかったものの、齒を食い縛って前を向き直る。カフィーも同じ心境なのだろうが、仕事は仕事だ。「私は一人で走れますッ。アケットさんを、助けに行つてあげてください!」

セラスが肩の上で暴れ、仕方なくジェイルは地面に降ろしてやった。

「あいつが言つたんだ。お前を頼むつて。任された仕事を放り出すと、怒られるんだよ、アケットに」

どうして助けに行かないのか、そんな表情をするセラスに、ジェイルは苦笑を浮かべて答えた。

信じて任された仕事だからこそ、それを放り出すことができない。例え仲間を助けるためであっても、アケットにとってそんな理由は畑の肥料にもならないのだ。

「……………」

ジェイルの答えに納得したのか、セラスは黙り込んで港へ向かう。フツと後ろを振り向いたジェイルが見たのは、アケットが漁業用の銚を投げてカイナの腹部を貫いた瞬間だった。

思わず拳を握り締めてしまったが、後ろをついてくるアケットが手を振つて「急げ」と合図する。銚で腹に風穴を開けられ、家屋の

壁に繋ぎとめられたカイナが絶命していないわけがない。そう、ジエイルは高を括った。

「……マジかよッ？」

そんなジエイルの予想に反し、カイナは腹に突き刺さった鉋を引き抜こうと足掻いている。致命傷を喰らった人間とは思えない動きで、壁から鉋を抜こうとしているのだ。

「あいつは殺せん！ 俺の予想だが——」

「あれ？ 皆さん、どこへ行くんですかッ？」

アケットが声を張り上げたところで、通りかかったラットルに声を掛けられてしまう。

「——すまん、帰りの護衛はできそうにない！ 他の護衛を雇ってくれ」

「ちよっと、どういうことですかッ？ うわッ」

逃げるアケットを追おうとラットルが身を乗り出したところで、

「頭を下げてろ。痛ッ……」

カイナが投擲した短剣に気付いてアケットがラットルを押し倒す。短剣はアケットの腕を掠め、刃を血に塗らす。

「大丈夫かッ？」

「これぐらい、かすり傷だ。積荷に隠れろ」

追いついてきたアケットの安否を心配するものの、傷は思いのほか深くないのか気丈に振舞う。

カフィーは先に、港の積荷の木箱に隠れる。セラスも後に続いて、食糧と思しき絹袋に山に身を伏せる。ジエイルとアケットも、適当な木箱を見つけて身を隠した。

「本当に大丈夫か？ 傷はそれほど深くないみたいだが、足がふらついていたぞ……」

「ああ、傷は、な。ただ、どうやら痺れ薬が塗ってあったみたいだ。すまん、ちよっと休むわ」

「お、おいッ……」

抜かったとばかりに自嘲の笑みを浮かべて、アケットが暗闇の中

で目を閉じる。ジェイルが呼び止めるのも聞かず、アケットの意識は睡魔の中へと駆け込んでしまった。しかも、昨日からしっかりと睡眠をとってなかった所為か、ジェイルにも睡魔の波がやってきてしまう。

「少し休むか。ここなら、カイナの野郎も迂闊に近づいてこないだろうし」

そう独り言を呟き、ジェイルも睡魔に身を委ねる。

まさか、カフィーとセラスまでもが、身を隠した積荷の中で惰眠を貪るなどとジェイルも思いはしなかった。誰にも起こされることなく、積荷は四人の存在を失念したまま船に積み込まれてゆく。

それから四人が目覚めたのは、積荷が積み込まれた船が海洋のど真ん中にたどり着いてからだった。しかも、ただの貨物船ならば問題はない。

「……？」

積荷の感触から一変して、木材の硬い感触が直に肌を伝わってくる。カビ臭い匂いも鼻を突くため、二度寝という安眠は妨げられる。目を覚まし、ジェイルはゆっくりと周囲を見渡す。

薄暗い船倉と思しき部屋で、鉄格子に囲まれた状態だということは理解する。鉄格子はそれほど広くないのか、他の三人も少し距離を置いて座り込んでいた。

「寝すぎだぞ、ジェイル。木箱から放り出されても寝続けるとは、どれだけ図太い神経をしているんだ？」

寝起きの一言目が、鉄格子にもたれかかったアケットのそれだった。

「手前えにだけは言われたか……それより、傷はッ？」

突っ込みも中途半端に、怪我を負ったアケットを心配する。

「心配はいらんよ。あまり深くなかったから、寝てる間に血は止まったよ」

布切れを巻いた腕を見せて、アケットが包帯の下で笑みを浮かべる。

無事であることを確認してジェイルは安堵する。そして、現状の説明を誰ともなく求める。

「で、これはどういう状況なんだ？」

「どうやら、海賊の積荷に隠れてしまったらしくて……。私も、セラスさんも、寝てしまっている間に見つかって捕まってしまうしまった」

「見ての通り、武器は奪われて抵抗もできません。私なんて、魔法を封じる手錠までかけられる様です。ジョニーなんかは、猿轡を噛まされてどこかに仕舞われちゃいました」

カフィーとセラスが答える。

セラスにおいては、『封魔の錠』と呼ばれる魔法を使えなくする円状の錠を両腕に嵌められている。杖が魔法や魔術を生み出す触媒だとするなら、『封魔の錠』はその逆で中和する性質を持つ。

ジョニーに関してても、喋る案山子なんぞというものは海賊にとっても不気味に映ったのか、檻の中にはいなかった。

『……ッ？』

四人揃って打つ手無しと諦めた瞬間、唐突に船全体が揺れる。暗礁にでもぶつかったのかと思っただが、船底にある船倉に海水が流れ込んでこないところを見るとそうでもないらしい。

しばらく弱震が続いた後、甲板から慌しい足音が響く。それから船倉へ、数人の男達が降りてくる。

頭に水夫のようにバンダナを巻き、船刀を腰のベルトに差した恰幅の良い男と、同様の格好で細身の男、中肉中背の三人だ。

「おい、外に出ろ！」

恰幅の良い男が声を荒げる。

「入れと言ったり、出ろと言ったり、どちらかハッキリとして欲しいもんだな」

「喧しい！ そっちの魔術師の娘は残れ。人質だ」

アケットの軽口を遮り、中肉中背の男が引っ張り出していたセラスを檻に戻す。

人質ということは、これから残りの三人にどこかへ向かわそうと
しているのか。それも、武器を返さなければ危険な場所へ、だ。

「何があつたのか聞かせてもらおうか？ 事と次第によつては、俺
達が協力しても良い。その代わり、俺達の解放を約束してもらうぞ」
「何があつたのか、は外に出れば分かる。但し、手前らに交渉の余
地があると思うな」

「はいはい、殺生与奪はお前らにかかつてる、つてことね。だが、
せめてその男をここに残すことはできないのか？」

交渉するのは不可能と見たアケットが、妥協してジェイルを指差
してくる。

「なんで俺なんだ？」

「ヘッ？ いや、セラスが心配じゃないのか？」

ジェイルが問い返すと、アケットは素っ頓狂な声で鸚鵡返しに問
う。

確かにセラスだけを残すのは心配だが、セラスが人質という立場
に置かれている現状では、どちらかというとジェイル達の方が有利
なのだ。

なにせ、仲間になって日の浅いセラスならばこの四人の中でも切
り捨て易い。アケットの言葉を借りるなら、自分達の命のためなら
仲間も見捨てる、である。

「駄弁つてねえで、とつとと歩け！」

妥協案も拒否されたらしく、三人は無理やり歩かされる。

甲板に出たところで、ジェイルは形容のし難い悪寒を背中に感じ
た。

その1（後書き）

名前のない三人組、好きだな、おい……。まあ、たぶん、名前を出さずに操りきれるのが三人ぐらいが限度だから、そうなるんだろ
うけど。

さてさて、四人の受難はまだまだ続く。これからどうなることやら。

時間があるときにでも、登場人物のアニメ声優（仮）でも考えようと思う。

その2

深い霧に覆われた甲板からは、海面どころか二メートル先の風景さえ見えない。

ただ、霧の向こうに薄っすらと船のシルエットが見えるのは確かだ。シルエットだけで判断すれば、アケット達が乗っている海賊船よりも大きい。

甲板に集まった五十人以上の海賊達からは、不穏な気配が漂ってくる。

まさか、海賊船が海賊に襲われたなどという冗談は言つまい。いや、一向に誰も乗り込んでこないことを鑑みても、海賊船ではなさそうだ。

「幽霊船だよ」

細身の海賊が、聞かずとも答えてくれる。

「幽霊船？ ああ、だからこんなに嫌な空気が流れてるわけね」

一瞬、何の話かと思ったものの、それを聞いてアケットは納得した。

霧の所為で衣服は湿り、海上の温度と相まって不快にさえ思えると言つのに、その身を襲う言い知れぬ悪寒はタダならない。

良く目の前の船を見てみれば、所々が大破し、浮かんでいることさえ不思議に思える状態だ。

「けどよ、例えこれが幽霊船だったとしても、無視して通り過ぎればいいだろ？」

「それができたら苦労しねえよ。何か分からんが、吸い寄せられるようにまったく船が動かねえんだ……」

ジェイルの疑問に、恰幅の良い海賊が苛立った声を出す。続けて、「この世界の海にはなあ、こんな伝説があるんだ。――過去に大勢の乗員を乗せた船は、魔王の起こした嵐に巻き込まれて海の底に沈んだ。その船は幽霊船となり、世界中の海を目的もなく渡る。突如

として霧の中から姿を現し、出会った船は亡霊たちの怨嗟と共に海の底へ引きずりこまれる」

船乗りに伝わる子供だましの逸話を口にする。

「それで、こいつに乗り込んで様子を見て来いってことか。どんな依頼でも喜んで受けるつもりだが、今回は相当に厄介な仕事を持ち込んでくれたな」

呆れるような話に、アケットが肩を竦める。

引き受けなければセラスがどうなってしまうのか、想像に難くはない。引き受けざるを得ないものの、決して勝算がないわけではなかった。

相手が幽霊だとか亡霊と言った魔物相手ならば、【神官】の職に就くカフィーが最も力を発揮できる場所であろう。

「昔の逸話なんてものは眉唾だと思うが、カフィーはどうだ？」

「ええ、師匠ほど分かるわけではありませんけど、彼らは何かを求めて世界中の海を渡っているようです。強い力が、彼らをこの世界に留めているみたいです。たぶん、強い悔恨が集まったためか、降^{ネグ}零術^{ロマンシー}で魂を繋ぎとめているんでしょう」

毎度のように、師匠に敵わないと言っているが、そこまで分かれば充分だとアケットは思う。

「武器は、とりあえず返してくれるんだろうな？ まあ、幽霊相手じゃ剣も何もあったものじゃないが」

「返してやるが、下手な真似をすると人質の命はないぞ」

「分かっている。幽霊退治でことが済むなら、死人を出すよりは穏便だ」

分かりきったことを、とアケットは呆れながら海賊達から渡された武器を手にする。どこまで物理的な攻撃が通用するのか知らないが、いざとなればカフィーの浄化魔術でどうにかなるだろう。

そうして、アケット達は準備を整えて、小船に乗り幽霊船へと潜入する。

近づくにつれて寒気を増してゆく霧の中、幻聴かそれとも亡霊の

怨嗟の声か、潮風に似た低い音が周囲を包み込む。

ある意味、人質になったのがセラスで良かったと思う。

目が見えない分、周囲の気配や感性に優れたセラスでは、幽霊船の中まで連れてくるのができなかったかもしれない。

「ふむ……。特に、何も出てこないな」

幽霊船の甲板に上ったところで、アケットが怪訝そうに呟く。

到着した瞬間に盛大な歓迎を受けると思っていたのが拍子抜けし、何も起こらない甲板で数分の待ち惚けを食らわされる。もちろん、幽霊の襲撃を態々望んでいたわけではないが。

「船室のほうに行って見ましょう。もし彷徨っている幽霊さんがいるのなら、解放して上げないと可哀そうです」

カフィーはそれなりに乗り気のようだ。

「彷徨っているだけなら良いが、本当に海へ引き摺り込まれるなんてことになるのは勘弁だぞ」

作り笑いを浮かべてジェイルが返すも、どこか表情が引き攣って見える。

考えてみれば、剣の道を究めようと双竜の大陸を旅していたアケットとは違い、ジェイルが亡霊系の魔物と見たことが少ないのは当然だろう。

ジェイルの表情を見て、カフィーが大丈夫と微笑みかける。そして、なぜか講釈が始まる。

「そもそも、亡霊系の魔物には三種類が存在します。一つは、強い思念が現世に残留することで亡霊となり、怒りの矛先を人間に向けてしまったもの。二つは、【呪術師】の死霊術によって意図的に作り出された生ける屍^{リビングデッド}。三つ目は、死霊術を石などの物質に埋め込んで作るゴーレムです。今回は、一つ目の例が当てはまるでしょう」

今回の例では、現世に思念が残留することとなった原因を解きほぐしてしまえば、この霧から解放されると言うのだ。

アケットとジェイルは納得こそするが、根底にある原因がまったく分かっていない。流石にカフィーでもそこまでは分ならず、実質

のところ手詰まりなのだ。

「……探索してみるしか、ないな」

船室へ下りる階段の前に佇み、アケットが溜息を漏らす。

灯りのない階段の下は深い穴倉のようで、風鳴りか亡霊の怨嗟か、低く鈍い音が駆け上がってくる。

「ここを進むのか……？」

「正直、俺も行きたいとは思わないよ。だが、本当に船を引き摺り込むっていうのなら、どれだけの猶予があるのかも分からん」

「急いだ方が良いのは、確かですね」

ジェイル、アケット、カフィーが意を決して、ゆっくりと階段を踏み締める。

軋む木材がまるで自分達の侵入を知らせているようで、自然の気配を消そうとしたのも無意味だった。故に、階段を下り切ったところで三人は少し遅い目の歓迎を受けることとなる。

「イツツ・ウエルカー……ムッ！」

始まりは、そんな愉快で元気な声からだった。

「……………」

嫌味つたらしく垂れ下がった細目に、薄っすらと分かる顔の各パーツ。全体を見ることができないほどにズームアップしてきた白い塊に、三人は沈黙しか返すことができない。

「もう少し、離れてくれるか……？」

驚くことさえ忘れて、アケットは鬱陶しそうに目の前の幽霊を押し退ける。

ピエロが被るような二股の帽子を被り、例の如く足のないやや肥え気味の幽霊がそこには居る。正直、唐突ではあったものの恐怖を抱くことはなかった。たぶん、幽霊にも人を驚かすのが得意なのと下手なのがいるのだろう。

人それぞれ、幽霊それぞれ、皆違って皆良い、だ。

「ノリが悪いよ、お客さん達。そこは、キヤーとか、ウワーとか、悲鳴を上げて来た道をUターンしちゃうところだよ。はい、リピー

トアフターミー。イツツ・ウェルカ…… ちょ、ちょっと、何で剣なんて抜いちゃってるのさ、包帯のお兄さんッ？」

「いや、盛大な歓迎にお礼の言葉もなくてな。その代わりとは言うては何だが——」

けれど、アケットは目の前の幽霊に疎ましさを覚え、腰の舶刀を静かに抜き放つ。

「——こいつを受け取ってくれッ！」

高速の二連撃が目にも留まらぬ速さで幽霊を三枚卸にする。

しかし、アケットの手には何かを切り裂いたような感触はなかった。

「幽霊がこの程度で死ぬと思っているのかい？ 幽霊は無敵なのさアンリバルドゥ

あゝ。ナメちゃいけないよお、お兄さん」

「チイツ……」

口の減らない幽霊に、アケットが小さく舌打ちした。

その3

この幽霊は、どうやらアケットが女であることに気づいていないらしい。

まあ、そんなことを教える義理も、必要もないが。
なます

膽切りにできないことは悔しいだろうが、カフィーがアケットの代わりに前へ出る。

「アケットさん、ここは私に任せてください。剣がだめなら、私の浄化魔術で」

「おいおい、冗談じゃないぜ。善良な幽霊を、剣士どころか修道士^{シスター}まで、寄って集って苛めるつもりかい？」

すると、幽霊が減らない口を開いてくる。

その言葉に、カフィーの良心が疼く。

神こそ信じていないものの、信仰するのは人である。人は人に傷つけられ、人は人を傷つけて生きていく。故に、傷つけずに済むのならばそちらの最善の方法をとるべきである。と、師匠である神父にカフィーは教えられていた。

「う、うう……それなら、こんな悪戯は止めて先に行かせてください。あなたたちだって、こうしていつまでも現世に縛り付けられたままでは嫌でしょう？」

無理やり浄化させるのは非人道的と、今度は説得にかかるカフィー。

その説得に、幽霊が露骨な嘲笑を浮かべる。

「はんッ、そいつは勘弁願いたいね。確かに自分たちでは成仏できないかもしれないが、こうしているのもあながち悪い気分じゃないのよ。そもそも、勝手に攻撃を仕掛けてきたのはそっちのお兄さんじゃなか」

『……ッ』

幽霊に凶星を突かれ、三人は一樣に口を噤む。

言われてみれば、相手の幽霊はこちらを驚かせるために姿を見せただけだ。それに対して、問答無用で切りかかったのはアケットだった。

いや、そもそも、無視して通り過ぎようとしてこの幽霊は道を開けてくれたのか。

「じゃあ、先ほどのことは謝ります。これで、先に行かせていただけま——」

「——嫌だね。元から通す気なんて、まったくゼロ。ギャアーハツハハハハハツ！」

即答と、嘲りを含んだ笑い声。

これで、カフィーを良心の呵責で抑えていた何かが一気に吹き飛んだ。寝具を中に投げ飛ばすぐらい簡単に。

カフィーの表情が陰り、少し俯き加減で小さく口を開く。

「我らが主よ、天に召しますのは……この糞つたれ幽霊じゃあッ！」
カフィーが切れた。

堪忍袋の緒が切れて、清楚で瀟洒な言葉遣いなど忘却の彼方へ放り出す。

カフィーは生まれついでシスターの修道女ではない。孤児だったところを、【神官】をしていた師に拾われて背徳都市へやってきた。始まりは大陸の人々に救いの手を差し伸べる行脚で、光による癒しの魔法を主とした【アコライト】の職を学びながら師に着き従う。

中位職では師の意志を継ぎたいと思い、魔法や魔術に限らぬ癒しの術を学ぶ【治療師】ではなく【神官】の道を歩んだ。

「酒を飲むは、面倒臭がり屋で、何を考えているか分からない師匠ですが、まだ可愛らしい方だと思います。けれど、私をこれほどまでに怒らせたのは貴方が初めてです」

言葉を紡ぐと同時に、船内にある微かな光を周囲に集める。魔術は魔法と同じで、その場に内在する属性しか扱えない。ただ、魔法では光球を一つ作り出せるのが精いっぱいの環境でも、魔術ならば形質を使用者の独自のノウハウで形成できる。

薄暗い通路に十数本の光を飛翔させた。

少しでも触れれば亡霊を浄化する力を持った魔術だ。

だが、直線に飛来する魔術を幽霊は苦もなく避けてゆく。

「それでも、こんな姿になる前は腕の立つ海賊だったんだぜ。この程度の攻撃でどうにかできると思うなよ。ほおくれ、お返しだッ」

光線を全て避け切ったところで、幽霊がどこからともなく小さな宝箱を取り出し、ジャグリングを始めたかと思えばそれを連続して投擲してきた。

「曲芸師の間違えだろッ？」

投擲された宝箱を、カフィーに直撃する寸前のところでアケットが一舶刀《カトラス》で弾き飛ばす。が、地面や壁にぶつかったかと思っていた宝箱が独りでにカフィーやジェイルへ襲いかかる。

考えてみれば、敵の武器が単なる宝箱だというのはおかしい。それ自身も、幽霊の一部だと考えた方が違和感も生まれない。

『なッ………？』

三人が同じ油断をして、鍵穴から突きだした鋭い針がカフィーとジェイルの四肢を決る。アケットだけが、再び飛来した宝箱を天井に弾き事なきを得る。

「油断大敵。この船の全てがお前らの敵だと思えよお。ほおくれ、どんどん行くぞッ」

一難去ってまた一難。

アケットを集中的に攻撃しながらも、不規則に飛び交う宝箱が後衛のジェイルやカフィーにも迫る。

ただ、バウンドすることが分かっているれば速さは子供の投擲ほどのもの。武器で叩き落とすことは差ほど難しくない。が、ここぞ、というところで自分たちは油断してしまうのだ。

「槍が……」

銀槍で宝箱を撃墜しようとしたところで、それが床板に飲み込まれようとしているのに気づく。粘度の高い泥に突っ込んだように動かない槍が、身を守るのとは逆に自分の足枷となる。

今度は頭を貫かんと、鋭い針を突出させた宝箱がカフィーに迫る。
「放せッ！」

戸惑っている、アケットが声を張り上げて叫ぶ。

慌てて槍を手放したところで、アケットが腹部に向かって勢いよく飛びこんできた。海賊船で連れ去られるまでに、何も胃に入れてこなかったことがせめてもの救いだ。

腹部にダイブを決めて来たアケットとともに、カフィーは船室の一角に扉を碎きながら転がり込む。

「あ、アケット、さん……。私は、貴方達のように鎧なんて着てないんですから、もつと優しく扱ってください……」

「修道女さんは割れ物注意、てか？ それなら張り紙の一つでもしておけ。ジェイル、そいつをこの部屋におびき寄せろ」

カフィーの苦悶を含んだ抗議を軽く一蹴して、アケットがジェイルに指示を出す。何か作戦を考えたらしいが、アケットは察しろと言わんばかりに説明もしない。

「おびき寄せろって、そんなことを大声で言ったら相手にも聞こえちまうだろうが……って、来てくれちゃったし」

「なになに、何か面白いものでも見せてくれるのお？ ベッドの上での絡みならお兄さん大歓迎だよ」

わざわざこちらの策略に嵌りに来てくれたことを感謝しながらも、何やら卑猥なセリフは無視をする。

アケットが簡素な部屋に置かれたベッドから檻褻切れ——もといシートを手にとって、口角を鋭く吊り上げる。

「ベッドメイクは手前えに任せるぜッ！」

アケットの投げたシートが幽霊の視界を隠す。

瞬間的にシートへ向かって肉迫したアケットを見て、カフィーはその意図に気付く。あまり背中を任されることなどはないが、いつもアケットやジェイルの世話焼きをしていると、誰がどんなことを考えるのか少なからず分かってくるものだ。その日に皆が食べたい物だとか、どのタイミングで問題を起こしてくれるかだとか、最近

になって分かるようになった。

その3（後書き）

世界観の説明が全然なされていないことに気付いた今日この頃…
…。

まあ、その役目はカフィーのお師匠さんがしてくれると思います
ので、五章ぐらいまでお待ちください。

その4

薄汚れた檻褻切れが宙を舞う。穴だらけの、もしかしたらこちらが覗けてしまいそうな、風通しの良いシートだ。

その前にアケットが体を滑り込ませ、カッター船刀を流麗な動きで縦と横から見舞う。繰り出された斬撃はシートを横一文字に裂き、外力を受けてベクトルが変化した布切れの向こうに現れた幽霊を、唐竹に振り下ろした一刀で二つに分かつ。

「だから、効かないって言っただろうがッ！ 同じことを何度もな
ん……」

嘲るように口を開いた幽霊が、豆鉄砲を食らった鳩のように口を
噤んだ。

「油断大敵。手前えの言葉だぜ」

アケットの唇が、包帯の下で不敵に吊り上がる。

振り下ろす一撃と同時に身を屈め、後方から飛来した本命の一発をやり過ごす。シートと、切りかかったアケットを死角にして飛び込んできたのは、カフィーの放った浄化の光。

意表を突く攻撃に、幽霊は少なからず狼狽する。そう、意表は突いた。戸惑うのも、少しだけ。けれど、避けられない攻撃ではない。幽霊が慌てて二つになった半透明の身を左右に捻り、紙一重のところでは光の一矢を避ける。もし体が半分にされていなければ、横幅が確実に足らなかつただろう。アケット達が策に溺れる形で、作戦は見事に失敗した。かに思えたが、アケット達が二段構え程度の策を弄するわけがない。

「ふふッ」

不敵に漏れたカフィーの含み笑いに、幽霊が死後初めて人間というものに恐怖を覚える。

死の次に訪れる死。まったく未開である新天地に対する畏怖、不完全な意思のままに生きて来た悔恨が、ありもしない爪先

からありもしない脳髓までを駆け上がる。

「次に、手前えはこう言う。とんでもねえ奴らを怒らせちゃった、って、なッ」

幽霊の背後に回り込んだアケットが、幽霊を嘲りながら三度斬線を虚空に描いた。

「とんでもねえ奴らを怒らせちゃった。って、ストップ、ストップッ！」

六等分された幽霊が、カフィーの放とうとした光の群れに降参を申し出た。

かくして、幽霊との第一戦がここに集結する。

無論、何度もこんな闘いを続けたいとはアケット達も思わない。

「とりあえず、無条件でこちらの要求を呑め。即刻、浄化されるか外の海賊船を解放するか。二つに一つだ」

「か、解放するッ。解放するから、浄化するのだけは勘弁してくれえッ！」

幽霊が泣きながら条件を呑み、一度は失った命を乞う。

そもそも、この幽霊に外の霧をどうにかする権限があるのか分かっていなかったものの、結果的にアケット達の目的は果たされたようだ。「いやあ、実を言うと、最初は俺だけが幽霊となって海を彷徨っていたのさ。一仕事終えた後に疲れて独りで船の上で昼寝をしていたらよ、急に嵐が来て港に繋いでいた縄が切れちゃったわけ。嵐に吞まれて死んじまったと思えば、こうして海を彷徨って、十数年は独りでも楽しめたものの……寂しくなって出会う船から仲間をかき集めた」

アケットとジェイルに背後から刃を突き付けられ、正面に光の魔術を展開したカフィーに脅され、正座しながら幽霊が身の上話を語る。

「それはいけませんねえ」

幽霊から身の上話を語られて直ぐ、カフィーが何やらポツリと呟いた。

修道女とは思えないどす黒いオーラに、アケットは失念していたことを思い出す。

どうして、光の力が弱まる暗闇の中で、カフィーが大量の魔術を展開できたのか。言わば、これはカフィーの感情と引き換えに作り出したもの。

「このご迷惑な幽霊船は直ぐにでも浄化してしまわないと」

「ナ、ナニヲ、イッテラッシャルノデスカ？」

幽霊の表情が強張り、片言の問いが飛び出す。

光は癒しの体現だ。傷を直ぐに治療するという意味ではなく、新陳代謝を活性化させて治りを早くする。そして、痛みを和らげる効果を持つため、治療魔法という意味合いが強く出回っている。実質、本当に治療魔法——魔術を使えるのは中位職の【治療師】からであり、【アコライト】程度を極めても掠り傷を癒すのがやっとなのである。

逆に言えば、人間が持つ正の感情を引き換えに光を生み出すこともできる。故に、口調こそ今までと変わらないが、今のカフィーは殺人鬼にも似た憎悪を臍腑に抱えている。

「ああ、もう良いから。その光を消しちやいなさい。俺達まで殺されそうで怖いんだ」

ジェイルがカフィーをなだめる。

でも、やはり根は本来のカフィーなためか、ジェイルの言葉を直ぐに聞き入れる。

「ふう……なぜでしょう、こういう無茶をすると胃のところが気持ち悪いです」

こんなことを続けて、胃に変な腫れ物ができたらどうするのか。いや、この作戦を考えたのはアケット自信なのだから、なんとかして責任を取ろう。

「それは良いとして、そろそろ戻ろうぜ。一件落着つてことで、海賊船も動くようになっただろうから」

いつまでもここに留まっても、冗長にセラスを待たせるだけだ。

下手に時間をかけて、セラスの身に何かがあっても困る。その時はその時で、こちらには武器があるのだから報復はできる。

そんなこんなで、三人は海での飛び込み仕事を終えて甲板に戻った。

二度と、他の船を捕まえて仲間にしな、という確約を言い含めて、だ。

「……………」

そして、甲板に出た三人の目の前には、思いのほか残酷な運命が待ち受けていたのである。

見渡す限り、そこにはスカイブルーとマリンブルーが広がる。海風が心地よく、差し込む陽光に目が眩みそうもなった。ただ、そんなことよりも立ち眩みがしそうな事実が三人に突き付けられる。

自分たちの載っている幽霊船を除けば、そこには遥か彼方まで蒼い世界が広がっている。

「ありませんね」

「ない、な」

「ああ、海賊船がないよな」

カフィー、アケット、ジェイルが口ぐちに呟く。

考えてみれば、直ぐに思いついたことだろう。幽霊船の戒めが消えた後、海賊達はアケット達の帰還を大人しく待つか――否。ならば、三人が海賊船に戻った後に、戒めを解かせればよかった。

そう後悔したところで、

「航海して直ぐ後悔？」

『うわあッ』

唐突に甲板から頭を出した先刻の幽霊に、三人が飛び退くほどの驚愕を見せた。

「そう、その反応が欲しかったわけ」

「……………」

三人の恨めし気な視線に、平然と幽霊が答える。

「おっと、誰かを驚かすなという約束はして……ああッ、待て待て、

これは冗談。冗談だから。武器と魔術を出さないでくれ！」

今にもあの世に送ってやろう、と言わんばかりの殺気に幽霊が慌てる。そして、そんなことより、と言葉を続けた。

「こればかりはあんたらのミスで、俺が責められる言われはない。だが、一つ提案がある」

『提案？』

幽霊の言葉に、三人が口を揃えた。

その4（後書き）

一週間ほど更新が遅れて申し訳ありません。

ちよっとした諸事情で、ネット回線が使えないため、このような遅延につながりました。

さてさて、アケット達の苦難はこれにて終了。続いては、セラスが凶われの身になって、悪い虫さんに襲われるお話です。期待してお待ちください

その1

カビ臭い、湿った嫌な臭いが鼻孔を擽る。

鼻を摘まもうにも、両手を後ろ手に縛られているため、できない。どうか口で呼吸をしながら、薄いローブを伝う、石畳の湿り気を持った冷たい感触に耐える。

周囲を石で囲まれた部屋というのであれば、『』に運び込まれた時の部屋と大差はない。けれど、そこにある温もりには雲泥の差があった。しかも、セラスを閉じ込めている扉は、木製のものではなく重厚な鋼鉄の鉄格子だ。

未だに海賊船で囚われの身をやっているのか、と聞かれれば――否、と答えるしかない。セラスは今、とある場所の牢獄に放り込まれているのだ。

「アケットさん……。ジェイルさん、カフィーさん、皆、無事かな？」

足枷を嵌められた両足を引き寄せ、セラスが誰ともなく問う。

いつもなら背中が無駄口を叩くジョニーが答えてくれるのだが、今日に限っては彼の姿もなかった。ここへ来た直ぐに、口応えをして何処かへ連れていかれてしまった。ジョニーのふざけた声が聞こえてこないだけで何よりも心細く、不安に胸を締め付ける。

幽霊船に乗り込んだ三人の安否を心配している暇さえないというのに、セラスは何処かに逃避する先を探そうと足掻く。そんな折、誰かが声をかけて来た。

「おい、小娘」

距離からすると、鉄格子の向こう側だろう。

聞き覚えのない声は、たぶん見張りの誰か。流石のセラスでも、十数人以上もいる人間を声で聞き分けるのは難しい。

「私、ですか……？」

周囲の気配で、牢屋に入れられているのが自分だけだと分かりな

がらも、セラスは念のために見張りに問い返す。しかし、何故か見張りの声が返ってこない。自分のことではなかったのか、と疑問に思っていると、石畳を敷き詰めた階段を下りてくる足音が薄暗い牢獄に反響する。

それ以上の言葉がなかったことに安堵したのも束の間、牢獄に足を踏み入れた何者かの声が再び悪夢を蘇らせる。

「おい、小娘。お前の番だ」

こちらは、聞き覚えのある見張りの声だ。

数日前から、セラスは夜も眠れない恐怖に苛まれていた。この恐怖から逃れるための逃避行さえ、男の声を聞いた瞬間に泡沫へと帰してしまうのだ。

この見張りの男が牢獄を訪れる度に、幾つも並ぶ牢屋から響く大人達の喚き声。

「嫌だッ！」

「止めてくれッ！」

「俺はまだ死にたくないッ！」

一人だったり、二人だったり、時には十数人がそんな悲鳴を上げて懇願する。命乞いをする。

中には、セラスをこんなところに連れて来た海賊達の声も混じっていた。最初は自業自得だ、と思っていながらも、徐々にその悲鳴はセラスの入っている牢屋に近づいてくる。一度連れだされた彼らが、再びここへ戻ってくることはないことには気づいている。故に、外で何が行われているか分からずとも、自分の命に危機が迫っていることぐらい容易に理解できた。

「お前だよ。魔法使いの小娘。ああ、目が見えなかったんだ……可哀そうに。内のボスは、誰だろうと処罰を許したりはしないからなあ」

見張りが呟く言葉に、嘲りこそあっても同情はない。しかし、何処かに恐怖を包み隠した声音にさえ聞こえる。恐怖で感情を支配され、麻痺した心が囚人を地獄へ連れ立たせる。

それがここ、^{↑ルヴァウンディア}「地獄の猛犬」と呼ばれ処刑場だった。双竜の大陸から南に海を渡った、黒金の大陸北東端に、^{（アレキドル）}ここはある。

正式な手続きを踏んで訪れれば、観光でも移住でも可能な工業大陸だが、不法入国者に対しては厳格な処罰が行われる。セラスもまた、運悪く海賊船と共に黒金の大陸に上陸してしまった、不法入国者だった。霧が晴れたかと思った瞬間、海賊船は三人を幽霊船に残して航行を再開してしまう。セラスの異論など聞く耳を持たない海賊達は、二日程の航行の後に手近な浅瀬に船を付けたのだ。

それが、「アレキドル」だったわけである。

「あそこで、私が逃げ出そうなんて考えなければ……」

上陸後の自分の行動を後悔するセラス。

海賊達が安堵して気を緩めたところを、セラスは自力で逃げ出そうと浜辺を走った。走り、たどり着いた先が岬に建てられた「ヘールヴァウンディア」の牢獄。

「私、つくづく運がなかったみたいです……」

「おい、さっきから何を一人でブツブツ言ってるんだ？ ほれ、着いたぞ」

何度、事情を説明しても取り合ってくれない見張りの男が、怪訝そうにセラスを睨みつけてくる。

しばらく素足で石畳の階段を上ってみれば、光の差し込む何処かに連れてこられていた。

「こ、ここは……？」

「お前は、今から裁判に掛けられる。ルールは簡単だ。勝てば無罪放免。負ければその場で死刑。分かりやすいだろ？」

「どついう、ことですか？ 勝つだとか、負けるだとか、普通の裁判って意味じゃありませんよねッ？」

問いに答えた男の言葉に、セラスは戸惑いつつも食いかかる。

男はそれ以上なにも言わず、手足を戒めていた枷を外してくれる。もちろん、『封魔の錠』も外された。

直ぐに齒車が回る音が、岩石に囲まれた室内に反響して正面の鉄

柵らしきものが引き上げられる。状況を整理する暇も与えてくれず、男が背中を押して光の差し込む先へと促されてしまう。

久しく見る陽光に軽い目眩を覚えながらも、セラスはゆっくりと前に踏み出した。

砂地の地面が砂埃を立てる。風を感じるのだから、ここは室外なのだろう。周囲を包み込むのは人のモノであるう大多數の歓声だ。

『それでは、只今から今日の第一試合を始めます——』

歓声に混ざって響いてくるのは、風の魔術で増幅されたアナウンスの声。

砂地に歓声、試合という単語から、セラスはそこが何らかの会場であることを察する。ただ、降り注ぐ陽光が立ち昇らせた反射熱に乗り、微かな臭いを感じ取る。単なるスポーツの類、というわけでもなさそうだ。

『——ルールは簡単です。集められた三人の囚人で、協力し合って処刑執行者を撃退してください。生きて撃退できれば、無罪放免となつて解放されます』

アナウンスの声がそこで止む。

やはり、ここは裁判所であると同時に処刑場なのだ。

否応なく鼻孔を突きあげる血臭は、足元の砂が数え切れぬほどの血を吸ったことを教えてくれた。そして、処刑執行者と呼ばれる何者かも、人間の情など持たぬ化け物であることが、漂う腐臭で想像できた。

その2

そこは円形をした闘技場。コロッセオ

九十度区切りに造られた出口から、最初に三人の囚人が姿を現す。残りの一つには、この世のものとは思えない肉塊の化け物が閉じ込められている。何日も獲物を食らうことなく、血と肉に飢えた化け物が。

仁王立ちになって闘技場を見下ろした青年は、思う。

なんと、醜惡な闘技場か——と。

幾度となく、この闘技場に放り出された囚人達が、化け物に食い殺されるのを見て来た。それを、まるでスポーツでも観戦するかのように声を張り上げる、どこから集まった無数の観戦者達。

この闘技場は、囚人達にとつての処刑場であり、観戦者達にとつての遊技場だった。

陽光を照り返す白銀の兜に包まれた凜々しい顔立ちを、害虫でも見るかのようにしかめる青年。昼間という時間帯のおかげで形を潜めた深紅の瞳で闘技場を見下ろす。年齢は二十歳ほどで、看守としては若手に入るであろう。いや、事実、彼は正式な「ヘルヴァウンディア」の看守ではない。

こんな格好だからこそ、彼を知る人物がその場にいても、気づきはしないだろう。いつも着ている黒装束は、忍び込んだ海賊船に置いてきた。

「俺も焼きが回ったか？」

青年が独りごとを呟く。

命を狙われているとしりながら、旅行のように旅を楽しむ獲物達。狙った獲物を港町で取り逃がしたと思えば、海賊につかまっていたり。海賊に化けて暗殺の機会を狙っていると、幽霊船とやらに向かわされている。

手段を選ばなければ、既に仕事を終えていたはずだ。つい先刻で

も、獲物であるはずの少女に声をかけて、牢獄から出そうとしてしまった。そのまま放っておいたら、自然と化け物の食い尽くされるというのに。

「まあ、あの小娘の暗殺を依頼した馬鹿どもは、殺られたみたいだからな。俺には関係ない」

依頼主の三人組が殺された以上、少女——セラスの暗殺は依頼に含まれていない。残るは、『バンガード』の長から受けた『』のメンバー暗殺だけだ。どういうわけかセラスも『』のメンバーとともに行動しているようだが、受けた依頼のリストに彼女の名前がなかったため、除外している。

ならば、なぜいつまでも闘技場で見張りに化けているのか。

強いて言うなら、離れ離れになった包帯の剣士達に、セラスの死にざまを伝えるため。それが——何百年も生きた吸血鬼が、人間の暗殺に身を竊^{やっ}して生き続ける、暗殺者カイナの獲物に対する手向けだった。

それに、この程度の窮地を脱出できないセラスの仲間を殺したところで、カイナが満足できるとは思えないからだ。

「それでは、しばし観戦させて貰おうか、魔法使いの小娘よ」

カイナはこの戦いを傍観に徹する。

カイナはセラスの背中を見詰める形で、その地平線に見える鉄の柵が持ち上がる。

姿を現したのは、濃緑とも新緑とも言えぬ濁った緑の肉塊に、二節の虫の如き脚部を左右に八本ずつ付けた化物だ。芋虫にも近い頭部から徐々に胴を太くしていき、尾部に向かってまた細くな^{ほそく}っていく。頭部と思しき部分には二本の触手が伸びて、何かを弄^{もよほ}るように蠢^{うご}いている。

触手の先端が丸く膨らんでいるため、初めて見る人間はそれを眼球だと思っだろう。しかし、これは単なる疑似餌の役割を果たし、実質の頭部に当るのは胴体についた円形に並ぶ巨大な口腔である。

八足をついた状態では見えないが、鋭い牙を軋^{やみじ}ませて鑢^{やみじ}のように

獲物の肉を削る。

「ビガーモスがこれほどまで大きくなるとは、な。いったい、どれだけの囚人を食わせてきたんだ？」

「確か、今期の所長が就任してから——あそこに座ってる男だ。あの人が始めた処刑方法なんだが、まだ三ヶ月ぐらいかな」

直ぐ側の観客が、小声で囁き合っている。

闘技場で蠢く芋虫をビガーモスと呼び、成体の一般的な大きさは人間の頭部ぐらいしかない、下等な魔物の一種である。普段は、洞穴を掘って、頭部の疑似餌で小動物を誘い込んで捕食する。

「まあ、原始的な魔物だから、どれぐらい成長するのかなんて調べた奴は居ないからよお」

「そうだな。それより、お前はどれに幾ら賭けたんだ？」

「いや……俺は、単に見学だ。囚人とは言え、人が食い殺されるのを喜んで見ていられる程、俺は冷徹じゃねえよ。ほんと、どうしてこんなこと許されるんだ？ あんな男を、所長に任命した奴の考えがわからねえよ」

「おいおい、滅多なことを言うな。聞かれでもしたら……ッ」

話し合っていた観客の二人は、カイナが一瞥すると同時に口を噤む。

理由は、「ガルニス」に居ながらも分かっていた。

今から一年ほど前、「アレキドル」の政権が移ったことにより、社会主義から一種の独裁政権へと変わったのだ。ここ「ヘルヴァウンディア」も、元の領主が死去して今の所長が就任した。正しくは、させられた。

けれども、所長本人は独裁的な現政権を笠に着てこの醜悪な遊技場を作り、賭博をしながら私腹を肥やしているというわけである。

今現在、こうして行われている児戯が良い例だ。

八本の足が交互に蠢き、ゆっくりと獲物に近づいて行く。

出場者である囚人に与えられているのは、各々一本だけの刀剣。

セラスにおいては、【魔法使い】の職を持っているためか、武器を

渡されずに生身で佇んでいる。

男でも、その醜いビジュアルに嫌悪感と恐怖心を抱くビガーモスを目の前にして、女性である出場者達が真つ当な神経を保てるわけがない。怯え、使い方も分からぬ剣を羽虫でも追い払うかのように振り回す。尻餅を付いて、必死に手足で足掻きながら逃げ惑う。

盲目というハンデを逆に生かしているセラスだけが、怯えることなく冷静に状況を観察する。

「だが、目がない状態でどこまで戦える？ 逃げ回ることはできるだろうが、闘技場の猛者相手に勝てるのか？」

セラスがどれほどまで状況を確認できているのか、一度は逃した標的に対して僅かながらの興味を持つ。

視覚は零と考えて、嗅覚は人並みと言ったところだろう。聴覚は鋭い——と言うよりも、微かなニュアンスを聞き取ることを得意とする。第六感を信じているわけではないにしろ、どこかに人並みより優れた知覚能力を持っているのだと、カイナは考えた。

しかし、問題はそこではない。

たとえ魔法が使えたところで、杖を持たない【魔法使い】は微風や焚き火を起こせる程度の力しか出せない。通常サイズのビガーモスならば充分に追い払えるだろうが、これまでに十数人の囚人を喰らってきた化物に効果があるとは思えないかった。

そんな予測を立てているところで、甲高い悲鳴がカイナの耳朵を撫でる。

その3

「きゃああああああああああ——ッ」

周囲に気配を張り巡らしていたところで、女性のものであろう悲鳴が空気を切り裂く。

人のものではない殺意——もしくは敵意——否、捕食という欲望にこそ気付いていた。この悲鳴は、多分、そんな死に囚われた者の断末魔だろう。

続けて、

「ぐッ、ふッ……」

という命の糸が切れた苦悶の声。

見知らぬ女性の死を悼みたいと同時に、感謝の念がセラスの脳裏を過ぎる。

大よその状況は掴んでいたものの、何が行われているかはわからなかった。けれど、女性の死が全貌を掴ませてくれる。

人間同士が殺し合う闘技場ではなく、人より大きな異形と生き残りを賭けた戦いなのだと、視覚の闇に映る白い靄が微かながらに見えた。

「なんて、酷い……」

完全に事切れないうちに異形の何かに捕食されて行く、女性の声を聞く。目を背けたくなりながらも、セラスにはその最後を看取ることさえできないのだ。

数分で、異形が一人目を食して、セラスに標的を変えたのがわかった。

その瞬間、直ぐにセラスはもう一人の出場者に向けて走る。

決して囷にしようと言うわけではない。ただ、自分にはなくとも武器を手に行っていることは一人目の時に分かっている。

「こ、こっちに来ないでッ」

女性の制止する声さえ振り切り、側に駆け寄る。

「どうしてッ？ どうして私のところに来るの……？ 私まで、狙われちゃうじゃないッ！」

セラスより幾場か年上であろう、女性の拒絶する言葉が胸に突き刺さる。

生き残りたいのは誰でも同じなのに、どうして彼女は救われようのない一縷の望みに賭けようという。

『これは貴女への贈り物』

何故か、聞き覚えのある台詞がセラスを納得させる。

今なら、少なからずその言葉の意味を理解できるような気がする。セラスの目が光を失ったのも、この醜い世界を少しでも覆い隠そうとした、からだと思える。

けれど、見たくないから光を失ったわけではない。ジョニーが伝えてくれる『』の皆の容姿を、自分の目で確かめたい。もっと、この世界を網膜に焼きつきたい。

敵わぬ願いに胸焦がれ、女性の拒絶が許せず、セラスは彼女の胸元を掴み上げ怒鳴ってやった。

「たった数分だけ生き延びて何になるのッ！ 生き残りたいのなら私の目に成りなさい！」

ジョニーが居ない今、正確に敵の居場所を見つけられるのは女性だけ。

そして、持っているはずなのだ。一人目の犠牲者と同様に、剣か何かの武器を。

「渡して。杖がなくちゃたいした魔法は使えないけど、それでどうにかなるはずよ」

生き残りを賭けた戦いである以上、相手の武器を奪ったり譲渡してはいけないというルールはないだろう。

ただ、魔法と杖には相性というものがある。

杖は魔法の力を増幅させる触媒で、各種魔法の属性と杖の材質に合う合わないがある。【魔法使い】が使える魔法は火、水、土、風の四種類だ。この四種類は自然の中から生まれた属性とされ、木製

の杖によって増幅される。続いて【魔法使い】が使えない、雷、氷、光、闇の四種類は自然を凌駕しているためか、金属の杖によって増幅される。

だから、セラスが女性から手渡された剣に、自身の魔法を増幅させる木製の部分など皆無なのだ。まともな使い方さえ分らない武器を持てば、必然的に戦闘能力は低くなる。

セラスは唐突に、剣の切っ先でローブの裾を膝丈ほどまで切り裂き、布切れを右腕に巻いてゆく。続けて、焚き火程度しか起こせなくなった炎の魔法を生み出して、ジリジリと剣身を赤く焼き始めた。ビガームスが十メートルまで近付いても、セラスは剣身を焼き続ける。

「ッ……！」

赤熱を帯びた剣が柄まで熱を伝導させ、布を巻きつけて保護した掌を蝕むかのように焼いていく。

熱い——いや、冷たい。痺れているようにさえ感じる。肉の焦げた臭いが、嗅覚を刺激して記憶の片隅に残ったあの光景を思い出させる。

消えゆく村。

今まで炎の塊だったものから、人形ひとがたが生まれ出て恨めし気にこちらへ歩み寄ってくる。焼け焦げた屍が立ち上がり、苦悶の声を喉から発してセラスを焦熱へと引きずり込もうとする。

違う、これは幻覚だ。一人だけ生き残ってしまった罪悪感が生み出した、ただの妄想なのだ。

なのに、どうして腕を掴まれる感触が伝わるのだろう。体が引きずられるのは、本当に幻覚だからなのか。

「い、いや……。どうして？ 私だけが、生き残ったから？ 私は悪くない。私は、悪くない……」

意識が遠くなり、力を失って膝が二つに折れ曲がる。

細やかな砂のベッドが体を抱擁するより早く、誰かの手がセラスを受け止めてくれる。

屍達の手ではない。もつと温かく、血の通った人間の手だ。直ぐに剣の持ち主だった女性だと分かる。

「お願い、私も生きたい。だから私にも戦わせて。これをどうしたら良いの？」

「……すみません、あんなに怒鳴って置いて、こんな様じゃ目も当てられませんね。ホント、私って助けられてばかりいるなあ」

「そんなことないと思うわ。さあ、もうそこまで近付いてきてるわよ」

「分かりました。それでは、奴が隙を見せたら――」

叱咤していたはずの女性に助けられ、気恥ずかしいもののセラスは次の指示を出す。

ビガーモスが足の射程圏内に入り、獲物を捕食しようと四足を大きく開いた。

「――投げてッ」

こちらの読み通り、隙を作ってくれたビガーモスに女性が剣を投げつける。女性の手を焼きながらも飛翔した赤き剣身は、致命傷にこそならなかったもののビガーモスの体に突き刺さる。

その瞬間、セラスは作り出していた水の球体を剣にぶつける。

高熱を帯びた金属は、過激な熱膨張と収縮に耐えきれず、その肉体を一気に分散させるのだ。剣を突き刺され、赤熱に焼かれ、傷口を広げられる。

流石の巨体も、その痛みには耐えられずに苦悶を乗せた咆哮を発する。呻き、悶え、醜い巨体を縦横無尽に振り回す。

しかし、それでさえ化け物を止めるだけの威力は持たなかった。

逆に化け物の怒りを買い、己の身を危険に曝したただけ。無論、セラスはこれで倒せなかった時の対抗手段は考えていない。

完全な手詰まり。

浅黒い緑の肉体が鎌首をもたげ、捕えることを忘れた異形が無数の牙を持つてして襲いかかってくる。

『いやあああああああああッ――』

遊技場に、二人の悲鳴が木霊する。

その3（後書き）

ふう。久しぶりに投稿できました。

ちょっとやつつけない感じになってしまい、全体的に違和感のある文章になってしまったと思います。さて、セラスの運命や如何に？

まあ、こんな時に次回へ続く！は生存フラグなんですけどね（笑）。

最近、ちよつとずつ『盲目の復讐者』も読者が増えてきて嬉しい限りです。

その4

どうしてだろうか。

自分の行動理由に疑問を抱く。

携えていた槍を、投擲してビガーモスに突き立てた理由を、自己分析する。

「解答なし……」

逡巡の後、カイナは小さく呟いた。

自問自答を繰り返しても答えは出ず、周囲の視線を集めながらカイナは闘技場へと飛び下りる。

「……………」

セラスと囚人の女性が、静かにこちらを見据えてくる。

「逃げるぞ。直ぐに追っ手がくる」

詳しい説明などできず、カイナは二人を連れて闘技場の入り口に向かう。入り口に構えた鉄格子を吸血鬼の持ち前の怪力で蹴り破り、地下牢に続く階段を下りた。

地下の最下層には牢獄があり、その途中で見張りの詰め所と、闘技場の観客席に出る階段がある。また、観客席に向かわず楕円形の通路を抜ければ外に出られるという構造をしている。

途中の詰め所で、急にセラスがブレーキを掛けた。

「どうした？ 急がなくては……」

「待つてください。ジョニーが、私の仲間が居るんです。彼は、一人じゃ動けないもので」

急かすカイナの言葉に、セラスが必死に抗議してくる。

ジョニーという名前は聞き覚えがないが、一人——ひとつだけ覚えがある。

まさか、この状況で案山子ごときを助けようと言い出すのだ。

「貴女がセラスさんだったんですか。ジョニーさんなら、この下の地下牢に居ます」

どうやら、囚人の女は案山子と知り合っていたらしい。

「すみません。私はジョニーを連れてきますから、この人と一緒に逃げてください。私は、後で追いつきますから」

なぜ、セラスは自分の命よりも案山子を優先するのか。

人間の中で過ごしながらも、一歩ずれたところで傍観していたカイナにとって、仲間だとか友人といった絆を理解することはできなかった。

こうして、セラスや女性を助けたことさえ、単なる気紛れの一部だったのだろう。

ならば、態々、ここでセラスを待つてやる義理などない。

「居たぞッ！」

結論付けたところで、追手の衛兵達が殺到してくる。

「チッ……」

予想よりも早い追跡に、カイナは舌打ちをする。

闘技場側の階段と、地上に出る階段から追手がやってくるのだ。

不本意ながら、挟撃を避けるために地下へ下りる方が正しいと判断した。

地上へ向かっていた踵を返して、状況を察したセラス達と共に地下へ向かう。

続々と兵士達が地下までついてくるため、カイナ達が地下牢の奥へ到着するまでに牢獄いっぱいになり人がひしめき合ってしまう。

どうやら、その牢獄の囚人は助けた女性が最後の一人だったらしい。どの牢獄からも人の気配がしない。

「退け！ 退かんか！ ふう……」

そんな人混みの中から、小柄な黒ローブの男が抜け出してくる。

どうやら、小太りなためか人混みを通り抜けるのもやつのようだ。カイナには、その小太りな男に見覚えがあった。

この牢獄の所長を務める領主だ。

禿頭でありながら濃い褐色の髭を顎に生やした、ドワーフ族の末裔に位置する男。確か、名前は。

「アンベル、とか言ったか？」

「名前を覚えていてくれてありがとう、脱獄者諸君。如何にも、私が地獄の猛犬（ヘルヴァウンディア）が所長、アンベル……」

「ごたくは良い。命が惜しければ、道を開けて俺達を解放しろ」

アンベルと呼んだ男と交渉を試みるカイナ。

しかし、アンベルの浮かべた厭らしい笑みに、カイナはそいつの腹の底を悟る。

「私は犯罪者に恩赦を掛けるつもりはない。脱獄者なら、尚更、容赦するわけにはいかないのだよ。この黒金の大陸を守るために、ね」
嘘をつけ。

ここに囚われている囚人のほとんどが、簡単な罰金で済むような軽犯罪者だ。

目的こそ調べてはいないものの、賭けのために軽犯罪者を闘技場で戦わせる以外に、ここでは何らかの陰謀が進められているのだろう。

それを露見させないために、脱獄者は容赦なく捕えて殺す。

「ドワーフ族は、豪気ながらも気の優しい種族と聞いていたが……文献に間違えがあるようだな」

「そうですよ。ドワーフは気前の良い種族さ。吸血鬼でさえ、日の下に晒してジワジワと嬲り殺すぐらいに、ねえ。さあ、捕えなさいッ！」

軽口の応酬で時間を稼ぎ、退路を探そうという穏便な心意気は通じないらしい。

号令と共に、兵士達がカイナ達に向けて襲いかかる。

「獲物以外を殺すというのは気が引けるが、刃を向けるのならば致し方がない」

セラスと女性を背後に下がらせ、カイナは襲い来る兵士達に肉迫する。

一瞬の走行過程も置かずに、脚力のみでトップスピードに入る。筋肉のバネを最大限に伸縮させ、大地との反作用を爆発力に転化し

た吸血鬼の走力。他の魔物に類を見ない再生能力を生かし、筋肉と骨が砕けることさえ厭わずに振るわれる腕は、鞭の如く弧を描いて空を裂く。

武器など無くとも、脆弱な人間の頭を吹き飛ばすぐらいはできる。素手だけで肉を抉り取り、足の一振りで胴体を二つに分かつことも、肘打ちで胸骨を粉々に砕くことさえ容易い。

近接戦闘で、吸血鬼に勝てる人間などいない。闇の眷属の中でならば、魔王に次ぐ力を持つとまで言われている。

そう信じて来た誇りが、ある一人を前にして崩れ去った。

アケットという名の、包帯を取られることに異様なこだわりを持つ双剣の剣士。

「誇つても良いぞ、人間。私をこれほどまでに、熱く滾らせたのはお前が初めてだ。逃げずに戦えッ。私をもっと楽しませてみる！」
思えば思うほど、焦がれれば焦がれるほど、吸血鬼の本能が目覚めてくる。

目の前の雑多な雑魚どもではなく、アケットの血肉を食らいたいと、溢れる脳内麻薬が殺戮衝動へと帰化させる。

気が付けば、ほとんどの兵士が遁走し、残っているのはセラスと女性、アンベルの三人がカイナを見据えて尻餅についているだけだ。
「……チッ。つまらん」

沈静化してくる頭で、些か度が過ぎたと反省する。

所詮、雇われただけの有象無象な兵士など、カイナの歯牙に掛ける価値などなかったのだ。

悪態を吐き捨てながら歩き去ろうとするカイナの後ろを、未だに怯えながらもついてくるセラス達。

まあ、目的は果たした。もう二度と奴らも追ってきたりはしないだろう。

「ジョニー、どこなの？」

セラスの呼ぶ声に、地下へ下りて来た当初の目的を思い出す。

「あの、案山子さんの居場所を教えなさいよ」

怯えたアンベルに、セラスが見下ろすように訪ねている。虎の威と言いたいところだが、これまで散々、怖い目にあわされたのだから何も言うまい。

「か、案山子と杖なら、上の詰め所に仕舞ってある——」
あつさりとジョニーの居場所を聞き出し、三人が上に向かおうとした時だ。

カイナは、殺意と悪意がおかしな化学反応を起こしたことに気付く。吸血鬼特有の嗅覚が、振り返るよりも早くその化合物の香りを捉える。

その4（後書き）

遅れながら、あけましておめでとうございます。今年も『盲目の復讐者』をよろしく願います。

時節の挨拶はそれだけです。言葉を並べるより、今は簡潔にお伝えしたく存じました。それでは、今年も良いお年であることを願います。

その5

その気配に気づき、後ろを振り向くまで五秒ほどの間だった。決して早くはないタイミングだ。

アンベルが剣を握り、セラスへ向かって刺突を繰り出す。

回避するには遅過ぎた。避けられない。それだけを脳が理解する。自分を助けてくれた男性が、なぜアンベルだけを生かしたのか。恩人の心情を理解できなくとも、人が死ぬ瞬間に立ち会いたくなかったセラスにとって、最後の一人を残した良心に感謝した。

ただ、今は後悔している。

自分の手で、殺しておけばよかったと。

光を通さない視界の中に映る、この小太りな男が、殺されなかったからと自分達を大人しく見逃すわけがなかったのだ。

恩人の男性にこそ敵わなくとも、一矢報いようと武器を取ることぐらい予想はできたはずなのに、どうして放って背中を向けてしまったのだろう。

火傷をした掌が、今頃になって疼きだす。

強く、火傷がなくとも痛いほど、拳を握りしめているからだ。

しっかりとアンベルの動向を確認しておけば、こんなことに——助けた女性がセラスを庇って刺されることなど——なかったのに。

「ハッハハハハハハッ！ 私を、私を馬鹿にするからです。お前らみたいなゴミは、ここで朽ちるのがお似合いなんですよッ！」

恐慌状態。違う。正常。

この男は、こういう男だ。

詳しくは知らなくても、セラスには他人の本質が見抜けた。声の質、脈の動き、あらゆる情報が五感を通して存在の在り方を教えてくれた。心臓の一突きで息絶えたはずの女性を、何度も刺突する様が、生まれながらの狂人であることを示す。

「こ、この、外道が……」

だから、許せなかった。

アケットにしても、ジェイルにしても、それに与するセラスさえも、他者の命を奪うことはもしかしたら悪と呼べるのかもしれないけれど、二人とも他人の死を喜んだりはしなかった。刃を向けられた時だけ、防衛という形のみで命を奪う。権力を振りかざして、人を虫けらのように見下して、欲望のままに死を楽しむこいつとは違う。

「外道で結構です。貴女も、直ぐにこうなるのですから、今のうちに好きなだけほざいておきなさい。そちらの吸血鬼は、興味なさそうですね」

アンベルが吸血鬼と呼ぶ恩人は、別に興味がなくてセラス達のやり取りを見ているわけではない。

止めたところで、セラスの怒りは収まらないだろう。そして、アンベルを生かすも殺すも、どちらを取ったところで一文の得にならないから、傍観しているだけのこと。

「私も、人を殺すのは初めてですから、優しくできるか分かりません。まあ、あんたを優しく殺してやるつもりなんて端からありませんけどね！」

焚き火程度しか起こせない魔法で、どれだけ武器を持った男を相手にできるのか。自分でも分からない。

けれど、今なら「ヘルヴァウンディア」を崩壊させるだけの魔法も使えるような気がする。感情が魔力を左右させるという理論を考えれば、今のセラスでも十分な魔法が使えてもおかしくはないだろう。

「えッ？ ど、どうして、こんな巨大な魔法が練れるんですか？

おかしいでしょ、明らかにッ！」

気付くのが遅い。

莫大な量の酸素が消費されてゆく。セラスの全身を覆い隠すほどの炎が、地下の酸素だけでは足りないと、外界に繋がる通路から己の糧をかき集める。それが風を呼び、外気の変化で結露が岩壁を伝

い、膨張と収縮で床が隆起する。

「これで、この腐った建物ごと壊してやがッ……」
炎を放とうとしたところで、頭部を何かが打つ。

「おお、セラスじゃないか。無事だったんだな」

声の主は、自分では歩くこともできないはずの案山子ことジョニーだった。

「ジョニー、なにをして――？」

「風で吹き飛ばされてきたただけだ。それ以上でもそれ以下でもない」
それほど強くぶつかったわけではないが、唐突に痛みが襲ってきたのと、ジョニーの方を振り向いたため魔法への注意が散漫になる。

「――未熟者が」

セラスのうっかりに、男の呆れ声が聞こえてくる。

膨大な魔法が術者の制御を離れれば果たしてどうなるかくらい、魔法を聞きかじった者なら誰にでもわかる。溜めに溜められた炎は自己の思考を失い、術者との命令系統を離脱して暴走する。

それはただの炎という形ではなく、一定の範囲に集まっていた物が一瞬で拡散するのだ。

当然、爆発。

幸いにも、セラスとジョニーは再び男に助けられ、浜辺に佇んで立ち昇る黒煙の香りを嗅ぐこととなった。

「どうしよう……。あの女性ひとを吊ひって上げられなかった。あんな外道と一緒に眠るなんて、可哀そうだね」

そんなことをぼやいてみても、悪いのは自分なのだと諦めるしかない。

被害も、セラス達が居た地下牢だけを破壊しただけで収まり、しばらくは施設の復旧に時間がかかるだろう。

「それで、セラス。これからどうするつもりなんだ？」

突然、ジョニーが問いかけてくる。

「どうする、って？」

「いや、だからさあ。逃げだせたのは良しとしても、どうやって」

ガルニス」まで戻るんだよ。海賊の船は没収されて、残っていたところで小娘一人、男一人で動かせるものじゃないけど、このままここに残っていてもまた捕まるだけだぞ？ あそこ程ではないにしろ、また牢獄行きだぜ」

「あッ……」

セラスが間の抜けた声を上げる。

別に、ジョニーの指摘が凶星を突いていたからではない。爆発の中で破れることのなかった鼓膜が、水平線の向こうから聞こえる声を捉えたからだ。

きつと、小舟を漕ぎながらこちらに手を振っているであろう、アケットとジェイル、カフィーに手を振り返してみる。

「これだけ派手に花火を打ち上げれば、こちらに気付くのも当然か……」

恩人が呆れたまま呟く。

セラスは、薄汚れた服のままでは気恥ずかしいのと、浜辺に到着するまで待ちきれない思いと、半々を背負って海へ駆け込んで三人の元へと向かう。

待つていれば良かったのに、とアケットに呆れられながら、再会をジェイルとカフィーに喜ばれる。

それを見届けた後、恩人はセラスに何を言うでもなく立ち去ろうとする。ただ、このまま帰すほどセラスも恩知らずではない。

「待つてください！ その……、助けてくれて、ありがとうございます。ずっと、お礼を言うのを忘れていました。それと、お名前を教えていただけませんか？」

恩人を呼び止め、最後の最後まで忘れていた言葉を口にした。
「……………」

そんな恩人の沈黙さえ、どこか予想していた答えだったのかもしれない。だから、しつこく聞くことはしなかった。

代わりにアケットが前に出て、恩人と数言だけ会話をする。

「セラスを助けてくれたのか。そいつは、お礼をしなけりゃいかん。

と言いたところだが、今は持ち合わせがなくてな」

「ならば、次に出会うまでに用意しておけ。たつぷりと、謝礼をいただくしよう」

「そうしよう——足の充てがないなら、乗っていくか？」

「いや、止めておく。中途半端な謝礼などに興味はない」

それを最後に、恩人の気配が砂浜から消える。

こうして、思いのほか長かった旅は一先ずの閉幕を迎えるのだった。

その5（後書き）

またしても更新が遅れて申し訳ありません。

いえ、決して執筆が遅いわけじゃないんです。今章の最後のまとめということで、他の話より少しボリュームが増えてしまい、推敲に時間が必要だった……だけですょ？

すみません、実家に帰ってきてからゲームとかニコニコ動画で実況プレイ動画なんかを観ていて、サボりました。これからはもう少ししだじめに書きます（汗）。

それでは、気を取り直して、ご拝読ありがとうございました！

その1

鼻孔を擽る芳醇な香りに意識を覚醒させたのは、日の光が真南に上ろうかという頃合いだった。

「う、うう……」

体を襲う鈍い倦怠感に低い呻きを上げて、体を起こそうと軽い伸びをする。シートから露わになった上半身の衣類が肌蹴ているのに気付き、セラスは慌ててシートに包まる。

どうやら、昨日は夜遊びが過ぎたようだ。

馬鹿なことをした、と後悔しつつもベッドを下り、ここへ来た時に寝ていた石壁の部屋を出る。宛がわれた二階の寝室ではなく、どうしてこちらに寝ているのかはつきりとした記憶がない。

「我らが眠り姫様のお目覚めですよ」

部屋を出たところで、最初にセラスを認識したのはその人物だった。

黒金の大陸でさえ珍しい『眼鏡』なる視力の補強器具を身に付けた、端正な顔立ちがセラスに向く。森羅万象を見透かすような漆黒の瞳に微笑まれながら見据えられ、一瞬とはいえ昨夜の痴態を思い出してしまう。

アッシュブロンドの無造作な髪が、人形とも思える顔の造形を人間の物にし、どこか怠惰な雰囲気さえ醸し出している。服装は神父様が来ているような法衣を身に纏い、腰には心もとなくも細剣レイピアが差してある。

どこの誰か、と問われれば答えは一つ。

この神父——ハーディこそ、噂に聞くカフィーの師匠に当たる人物である。

「お目覚めですか。もうちょっとで、昼食ができますので」

弟子の修道女、カフィーは木造のカウンターの向こうでハムエッグなどを焼いていた。

「昨日はお楽しみだったな。まさか、セラスのあんな姿が見られるなんて思わなかったぜ」

ハーディとカフィー以外の先客が、忘れ去りたい記憶を蘇らせてくれる。包帯の下で厭らしく笑みを浮かべるアケットが、恨めしい。そう言えば、昨夜の痴態の名残は跡形もなく片づけられていた。

「あ、あれは、ハーディさんとジエイルさんが無理やり……」

セラスは慌てて弁解と抗議をする。

「最初はそうかもしれませんが、その後もご機嫌で絡んできたのはセラスちゃんじゃありませんか」

今度はハーディが突っかかってきた。

美形の顔立ちに似ず、カフィーの師匠とは思えない性格の悪さをしているのだ。いや、尊敬しながらも愚痴をばやくカフィーが、毎日言っていることは本当だった。

「だって……初めてなのに、あんなに気持ち良かったんですもん……」

顔を赤らめ、両手の人差し指を突っつき合わせるセラス。

僅かに入り込んで来ただけで脳髓を突き上げる極上の快楽を思い出し、またあれを味わってみたいと臓腑が疼く。もう、セラスは虜になっている。

「初めてなのに、あれだけ大きいのはきつかったでしょ？ 僕も人一倍とは言われますけど、全部入ったことに感心さえします。乙女の神秘という奴ですか？」

「ハーディ、それは少しデリカシーがないぞ……。セラスを俺と一緒ににしたら可哀そうじゃないか。そりゃ、これからの楽しみができたのは嬉しい限りだけど、よ。女は入るところが違うんだよ」

「はいはい、二人ともおしゃべりはそれぐらいにしましょう。セラスさんも、痛むようなら薬を出しておきますよ」

ハーディとアケットの言葉を遮り、カフィーがお皿に盛った昼食をカウンターに置く。

「いや、考えても見ろ。お前はカマトトぶるからつまらないし、ジ

エイルも早くてつまらないだろ。だから、いままでは俺とハーディ、それからアイツの三人で楽しむしかかったわけだ。まさにセラスは原石なんだよッ」

なぜか良く分からない熱弁を振るうアケット。

「カマトトって……。私は、師匠の生臭なところだけは似たくないだけです。それより、冷める前に食べてください」

流石のカフィーも、こういう時は師匠の目の前で悪態も吐くらしい。

アケットは、食い下がるかと思えば、セラスと同じ穴のムジナなのか昼食へ欲望の矛先を向ける。セラスも席に着き、昼食を食べ始めた。ハーディも、弟子の一言が胸に突き刺さったと言わんばかりの表情で昼食を腹に収める。

そこへ、その人はやってくる。

「朝から何の話い？ とても危険なお話をしていたみたいけどお」
昨夜の乱れた状態ではあるものの、緩慢な喋り口調からは予想もできない美女が階段を下りてくる。

薄手のキャミソールにカーディガンを羽織っただけで、出るころは出て、引っ込むところは引っ込んだ絶世の美女だ。薄桃色のロングヘアは軽くカールして、アメジストを納めた寝ぼけ眼でさえ羨望を覚える。そんな美女の名は——知らない。

「ランさん、おはようございます。と言っても、もう昼なのですけどね」

呆れ顔カフィー同様、暫定的にランと呼んではいるものの、正しい名前はセラスも聞いていない。そもそも、ここにいる全員の名前さえ、本名なのかどうかも怪しいのだが。

「おはよう、ラン。大したことじゃありませんよ。昨日のことを思い出して、楽しんでいただけです」

「そうおなのお。長旅から帰って来たばかりなのに、ハーディも元気よねえ」

年齢も、呼び捨てで呼び合うハーディとランで、どちらが上なの

か分からない。二十歳後半ぐらいだろう。

「それで、いつまでそんな誤解を招くような会話をしてるんだ？」

横から口を挟んだのは、部屋の隅で寝ていると思っていたジョニーだ。もちろん、なぜ教会の名残である祭壇の上に張り付けられているのかは、問わない。

「誤解って？」

アケットが怪訝そうな顔をする。

「別におかしな話はしていませんけど」

変なことを言い出す相棒に、セラスが顔をしかめてみせる。

「いや、十分にいかがわしいだろ……」

『昨日のセラス歓迎酒宴会のどこが、いかがわしいと？』

ジョニーの呆然とした言葉に、残る五人が口を揃える。

「そりゃ、絡み酒なんて酒癖は人に言い辛いですけど」

「初めてで大ボトルを飲み干すなんて、できることじゃないわな。

ま、女には別腹があるからな」

「僕も、飲み負けるんじゃないかと心配しましたよ」

「酒こそ百薬の長よお」

「ほどほどなら、ですよ。私は飲みませんけど」

四人の反論と一人の突っ込み。

「いや、もう良い……。今日もここは賑やかです」

いつもの軽口を聞く元気もないのか、ジョニーが珍しく食い下がらない。

それはさて置き、ここにいない『』のメンバーはジェイルだけだ。カフィーの話によると、今朝早くから教会に出かけたとのことだ。

その1（後書き）

さて、アグネスが来る前に更新しておきましょう。ほんと、ただけ待たせるんだよ！ってファンの方々が御怒りになられています。感想とかないですけどね（笑）。

たぶん、この回が一番長くなると思います。佳境に入るまで残り二話、プラス重要な戦闘が『』の人数分とエンディングがひとつ。諸々を入れても十話近くになるんじゃないかな？

更新が遅いのは、サボっているのと戦闘シーンの順番が構想できていないのでしばしお待ちください。

それでは、いろいろと言いつきを重ねておりますが、ご勘弁のほどを。

その2

教会とは大抵、お祈りを捧げたりミサをしたりと言った、神様を祭る施設というのが一般的な認識だ。神父のハーディや、修道女のカフィーが居ることを鑑みて、『』のメンバーが寝泊まりする建物は教会と言えるだろう。もちろん、ここへ来た直ぐにセラスに説明したことも、嘘ではない。

「この街には、幾つも教会があるんですか？」

故に、セラスが怪訝そうな表情で問うのも分かる。

「最もな質問です。まあ、信教都市とまで呼ばれる「エルフィートス」でもなければ、一つの街に幾つも教会なんてありませんよね」
双竜の大陸「ガルニス」の東に闇灯の大陸「ムーニア」という大陸があり、神を崇める敬虔な信者の集う街「エルフィートス」。この世界には多くの神が存在し、各々を祭る教会が建てられている。もし「エルフィートス」出身者がいれば、こんな背徳都市と比べることさえおこがましいと憤慨されだろう。

まあ、教会などというものは例外を除いて一つの街や村に一つ、というのが広く伝わる概念である。

「もつとも、「ハイオン」の元祖教会はここで正しいのですが、神父さんが老齢でしてね。建物を維持していくだけの労力もないと、私達が宿代わりに引き継いだんですよ。それで今や、教会と言えば神父さんが開いている小さな露店のことを言うようになったんですよ」
「なるほど……。でも、どうしてここで一緒に住まなかったんですか？ ご老人を外に追い出すなんて、人のやることじゃありませんよ」

「もちろん、私達も神父さんに言いましたよ。世間体が悪いので、ここで神父を続ければ良い、と。ですが、あの神父さんも偏屈なところが多くてですねえ、『来るべき者のために、老兵は死なずしてただ去るのみよ』なんて言っちゃいまして」

ハーディのモノマネはどうでも良いとして、セラスも納得したように相槌を打つ。確かに、あの偏屈で頑固な神父が教会を空けてくれたお陰で、こうして温かい寝床と食い物にありつけるのだ。そして、ハーディやカフィー、ジェルやセラスと出会えたのも、この教会があつたからである。

そう考えると、思わず顔が綻んでしまう。

すると、食事の片付けを終えたカフィーに気付かれてしまう。

「あれ？ アケットさんは何を笑ってらっしゃるのですか？」

「い、いや……なんでもねえよ」

「ああ、またセラスさん達に会えてよかったなあ、なんて思っているんですね。うふふ」

「ち、ちげえよッ！ ハーディのモノマネが馬鹿らしくて笑っちゃただけだ！ 感慨に耽る程、俺はナイーブじゃねえつつのッ」

カフィーに突っ込まれ、慌てて弁解するアケット。しかし、自分でも分かるほど顔が赤らんでいるのが分かる。

「けれど、神父様が言った言葉もこのことを言っていたのでしょ
うね」

クスクスと笑っていたカフィーが、唐突に話を切り替える。

「うん？」

「いえ、ですから、ここに皆さんが集まったのは偶然とは思えないのです」

言われてみれば、『』に集まった六人は順々にスカウトされている。

ランと呼ばれる美女がどうした経緯で教会に来たのかは知らないが、ハーディが孤児だったカフィーを拾ったのがそもその始まりだ。続いて、カフィーが、「ハイオン」に訪れたアケットに施してくれた。そのアケットが今度は、街の路地裏でお山の大将を気取っていたジェルをスカウトして、彼がセラスを見つけて来た。

こうして見ると、神父が言い残した通り『出会うべくして出会った』という印象が強い。

「必然と言いたいところだが、背徳都市の掟を忘れちゃいけねえ。むやみやたらに他人へ干渉する奴は、酷い目に会っんだ」

アケットはそう、自分達の邂逅を否定する。

「現に、俺が街で喧嘩を吹っ掛けるように、ジエイルが『バンガード』に睨まれて、セラスが来てから色々と巻き込まれてるだろ。他者に干渉するってことは、こちらでも干渉される覚悟でいなくちゃいけねえってことだよ」

人との出会いは諸刃の剣だ。こちらが誰かを殺すつもりならば、こちらでも殺される覚悟をしなければならない。因果応報の世界。

もし己の干渉した人間が何らかの因果を引つ張ってくるならば、それを享受するのも当然であろう。もしそれが嫌ならば、自らの手で切り捨てなければ良いだけ。

「嫌なもんだな——ところで、ハーディ。今回はどの辺りを回ってきたんだ？ 昨日は帰ってくる前に酒盛りを始めちまったから、いつもの土産話を聞きそびれてたよな」

押し寄せる後悔に飲み込まれないように、アケットは話を切り替える。

「楽しみにしていただいているところを申し訳ないのですが、今回はあまり面白い話ではありませんよ。山の麓にある氷竜伝説が伝わる村を回って、中西部の魔王崇拜をしている村——というより廃村を見て来ただけですから」

「魔王崇拜？ それは、また、物騒なお話ですね。廃村と仰られると、王国が粛清を行ったのですか？」

確かにあまり面白いとは思えない。

「ガルニス」の北西から北東に伸びる山脈を氷の竜山脈ガルスアイと呼び、自然崇拜の国民は氷竜が住むと讃えている。

魔王崇拜については、要するに魔物たちから身を守るための建前だ。しかし、時としてその敬虔さが仇となり、王国から粛清されることもしばしある。

「近隣の樵きこりなどに話を聞いてみましたが、どうやら王国の粛清とは

違うようです。神の使いが一夜にして村を滅ぼしたという話ですが、まあ、眉唾でしょうね。そもそも、王国が肅清をするにしても、村一つを滅ぼすような真似はしないでしよう」

「面白い話ですね。それでしたらまだ、セラスさんの探している仇の噂ぐらい拾ってきてくだされば良かったのですが」

「仇？」

ハーデイに問い返され、うつかりしていたとカフィーは苦笑を浮かべる。

「私がここへ来た経緯は話しましたが、〔ハイオン〕に来た理由はまだでした。私が生まれた村を滅ぼした相手を探して、ここへやってきたんです。ハーデイさんなら、全ての属性を一度の魔術に込められる人物をご存じなのではないですか？」

他人に自分の事情を話させるのも申し訳なく思い、聞きに徹していたセラスがカフィーの言葉を引き継ぐ。

「全ての属性を一度の魔術に、ですか。それはもしかして——」

言いかけたところで、建物の扉が勢いよく開く。

何事かとその場にいた全員が視線を向けると、そこには関わりあいたくない一団の姿があった。

「——こんにちは、〝の諸君。そして、さようなら」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9359/>

盲目の復讐者

2011年10月25日11時03分発行